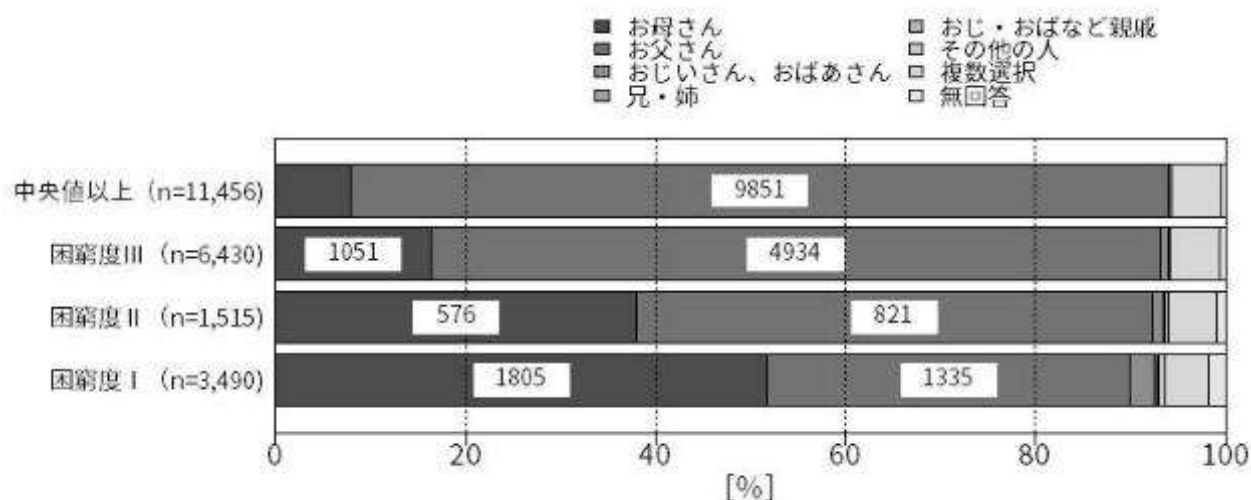


困窮度別に見た、生計の支えとなる人（保護者票 問 30(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

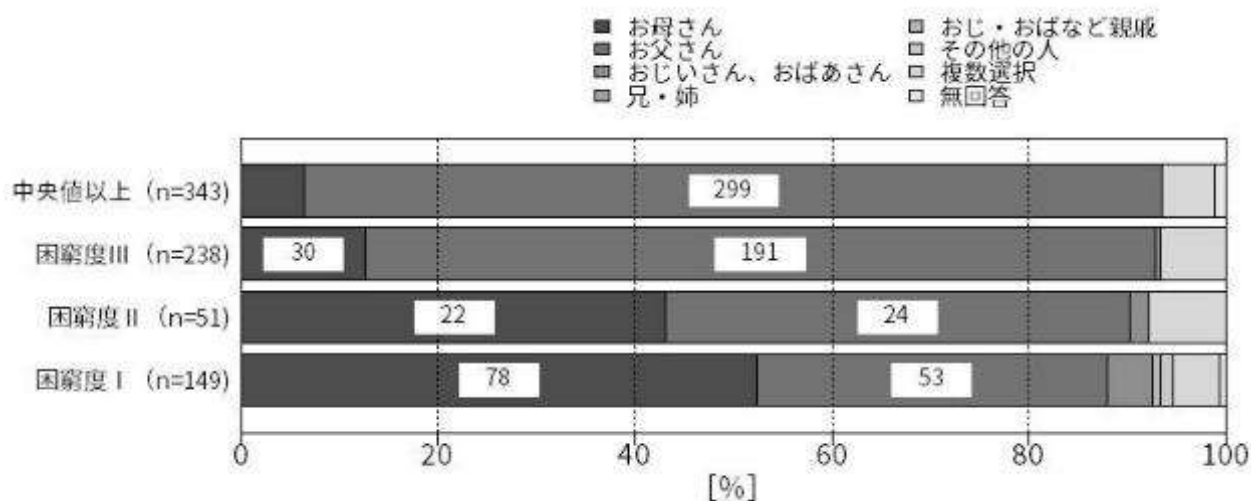
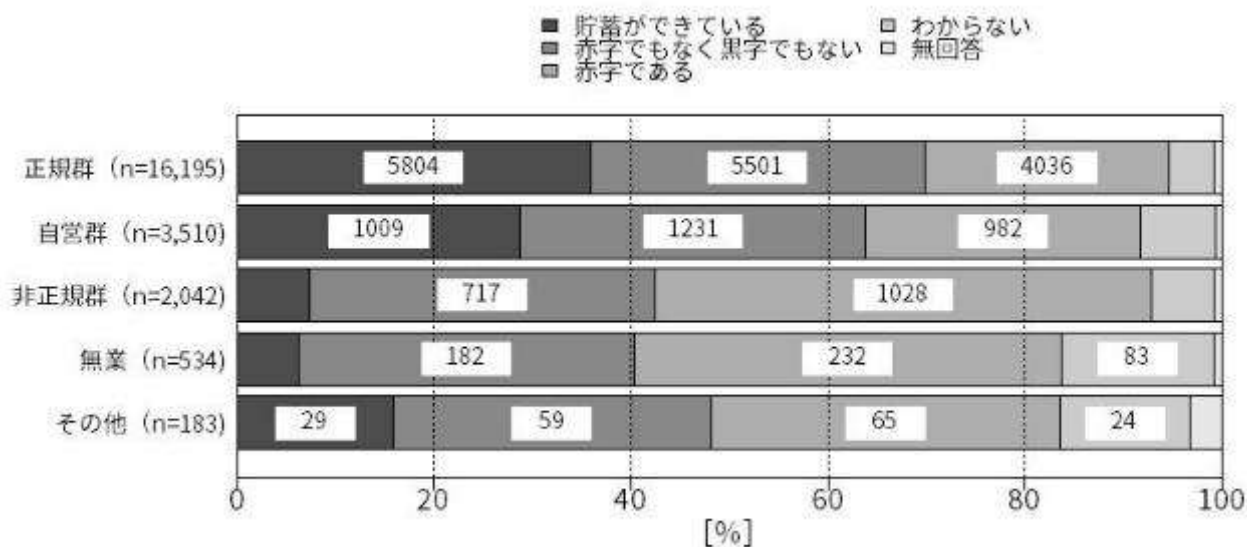


図 178. 困窮度別に見た、生計の支えとなる人

困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では「お父さん」という回答が 87.2%であった。困窮度が高まるにつれ、「お母さん」という回答が多くなる。困窮度Ⅱ群では「お母さん」という回答は 43.1%、困窮度Ⅰ群では 52.3%であった。

就労状況別に見た、家計状況（保護者票 問6(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

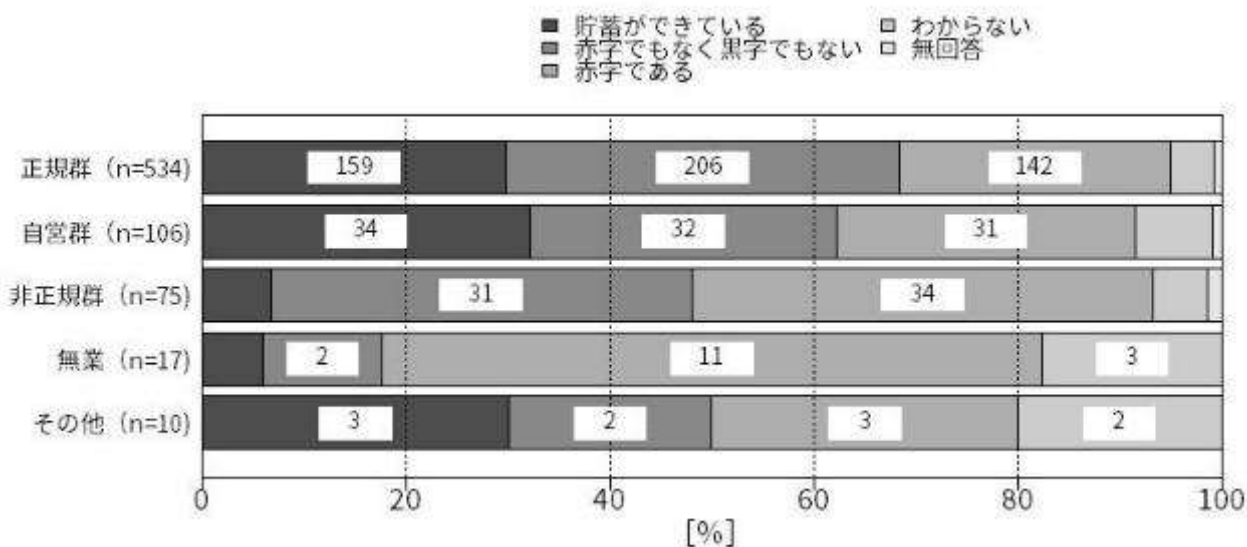


図 179. 就労状況別に見た、家計状況

就労状況別に家計状況を見ると、「正規群」・「自営群」では貯蓄ができている割合がそれぞれ、29.8%、32.1%であった。「非正規群」では「赤字である」と回答した人が 45.3%であった。「赤字でもなく黒字でもない」群に大きな差は見られない。

＜雇用に関する考察＞

本調査からは、雇用形態が所得階層の分布に影響を与えていることが明らかになった。中央値以上の群では86.8%が正規雇用であるのに対して、困窮度Ⅰの群ではその割合が半分以下の30.6%であった。正規雇用であるにもかかわらず、困窮度Ⅰの群に該当する者がいるという点については、留意する必要があるだろう。

困窮度と学歴の関係についても、困窮度が高い群ほど、学歴が低いという傾向が見られた。母親が大卒である割合が、中央値以上の群では14.3%であったのに対し、困窮度Ⅰの群では2.0%にとどまっている。中卒、高校中退の割合を比較してみると中央値以上の群では、いずれも1%台であるのに対し、困窮度Ⅰの群では5.4%、12.1%であった。同様の項目を父親でも見てみると、中央値以上の群では大卒が27.1%、中卒が2.3%、高校中退が2.9%であったのに対し、困窮度Ⅰの群ではそれぞれ5.4%、6.7%、4.7%と母親と同様の傾向が見られた。なお、学歴が高い群ほど正規雇用の割合が高い結果となっている。

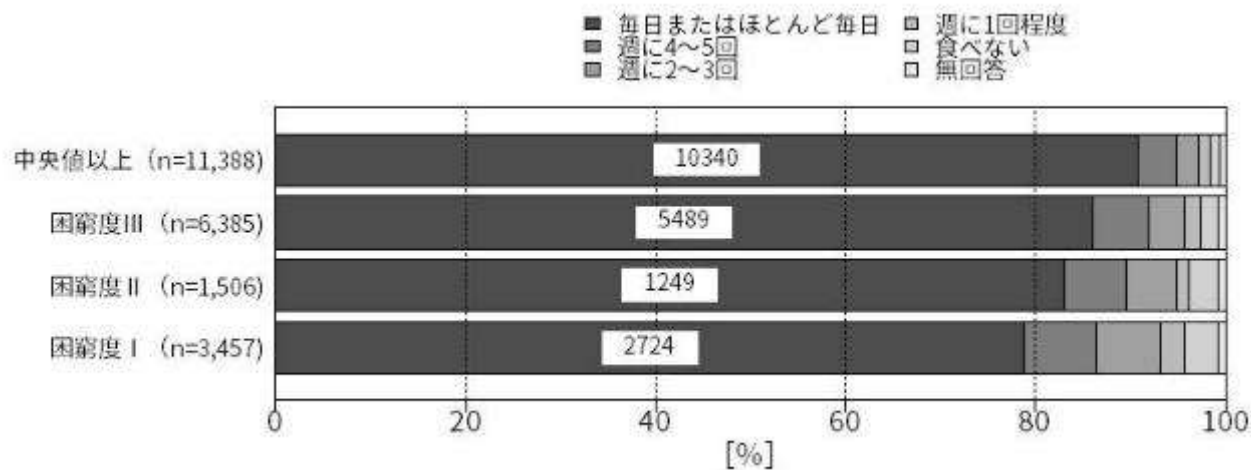
世帯構成と就労状況の関係ではふたり親世帯と比較して、母子世帯では正規雇用の割合が低く、非正規雇用の割合が37.8%と高くなっていた。主たる生計維持者が母である世帯は困窮度Ⅰの群では52.3%と、困窮度が深刻な群において、母子世帯の占める割合が高いことが示されている。

貯蓄状態の格差も見られた。正規雇用の世帯の29.8%は貯蓄ができていると回答したのに対し、非正規の群では45.3%が赤字であると回答した。

3-3. 健康

困窮度別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

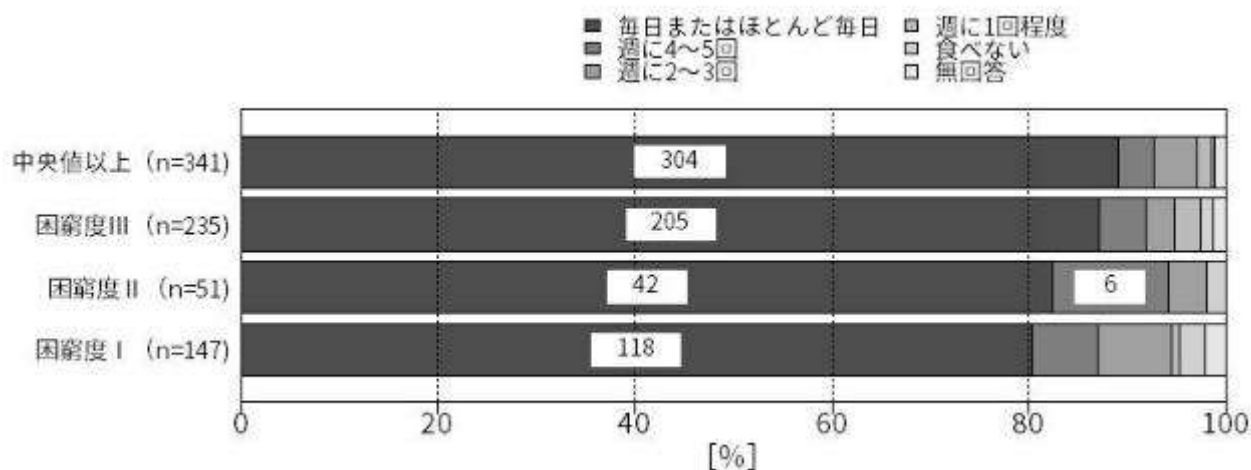
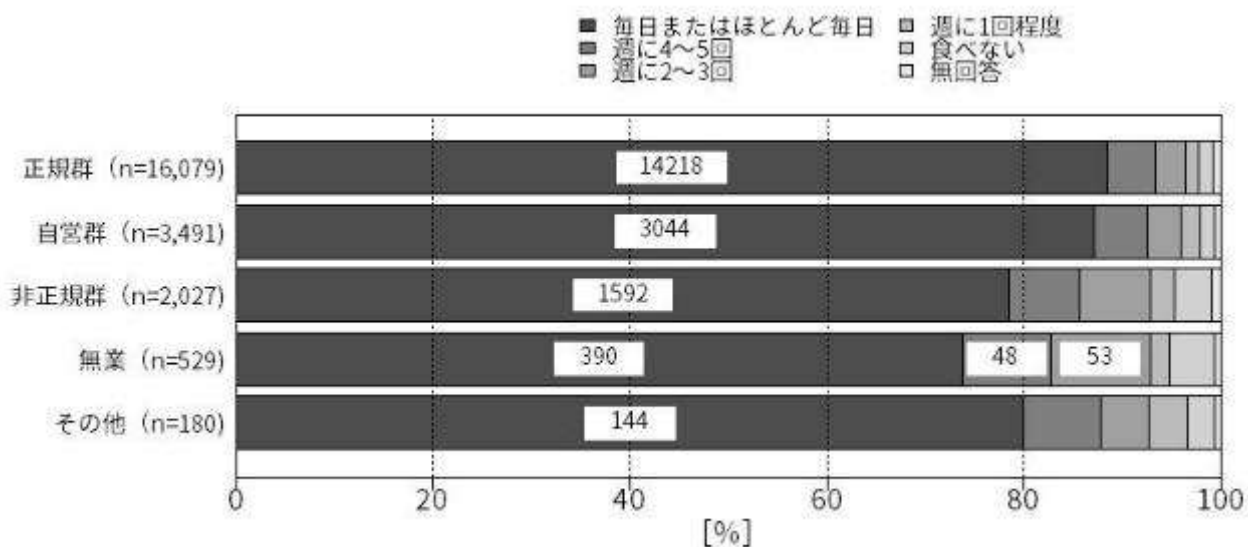


図 180. 困窮度別に見た、朝食の頻度

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにしたがって、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる頻度が減る傾向が見られた。困窮度Ⅰ群では、17.7%が「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていないと回答した。

就労状況別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

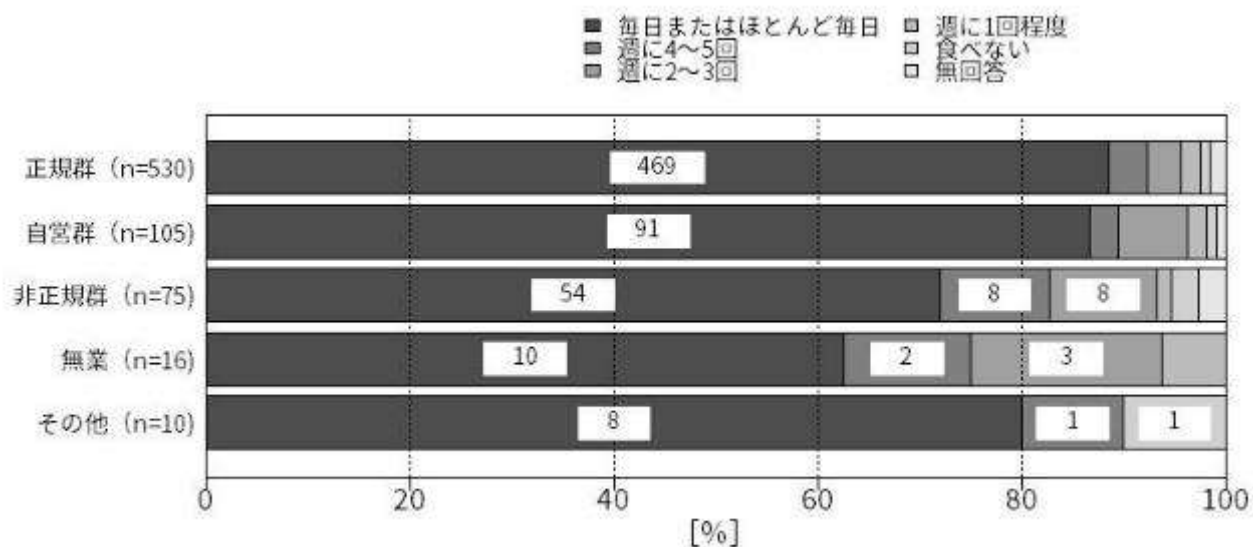


図 181. 就労状況別に見た、朝食の頻度

就労状況別に朝食の頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる割合は、「正規群」で 88.5%、「自営群」で 86.7%、「非正規群」で 72.0%、「無業」で 62.5%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）
 （子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

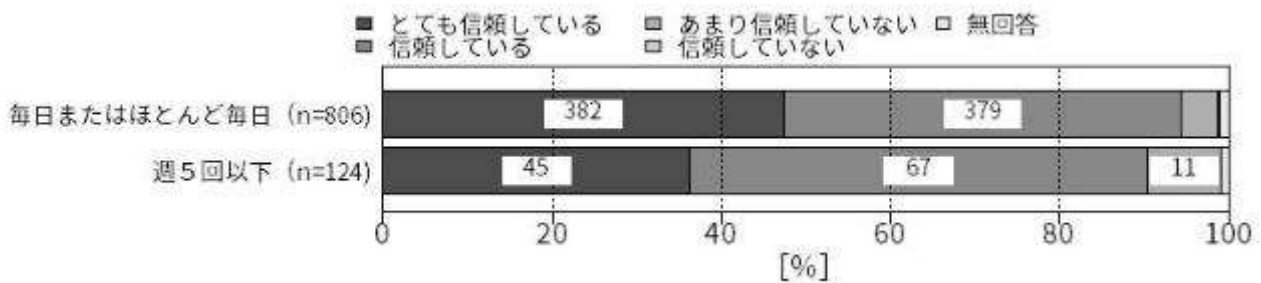


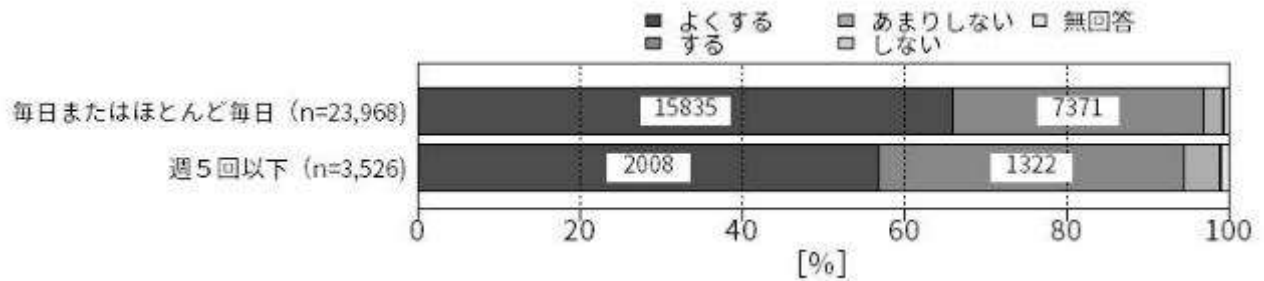
図 182. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもを「とても信頼している」との回答が 47.4%であったのに対し、「週 5 回以下」では、「とても信頼している」と回答した人は 36.3%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

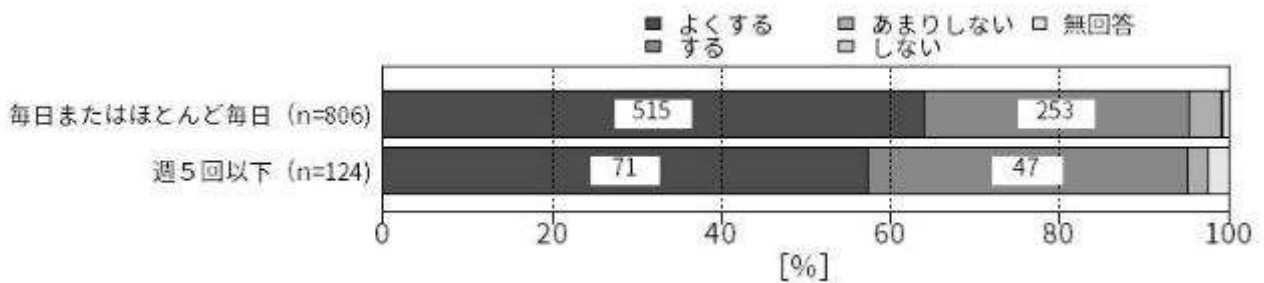
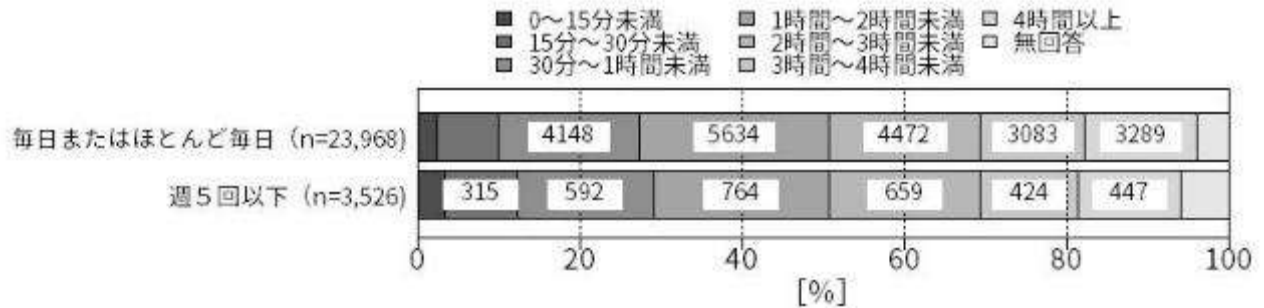


図 183. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもと「よく会話をする」との回答が 63.9%であり、「週5回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は 57.3%である。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））
 （子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

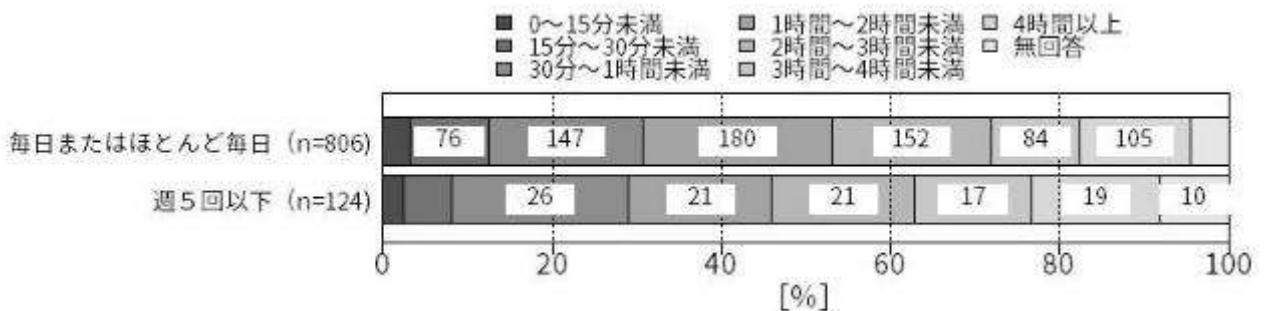
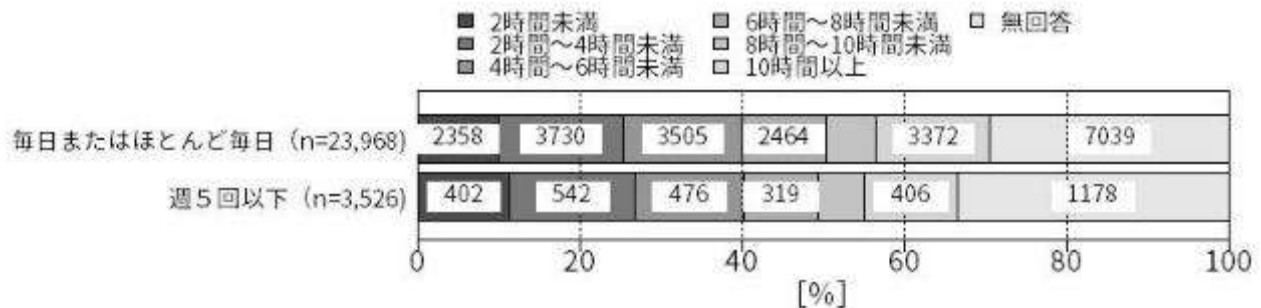


図 184. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり
 （子どもと一緒にいる時間（平日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では「1 時間～2 時間未満」と回答した割合が高く 22.3%であった。「週 5 回以下」の人では「30 分～1 時間未満」と回答した割合が高く 21.0%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））
（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

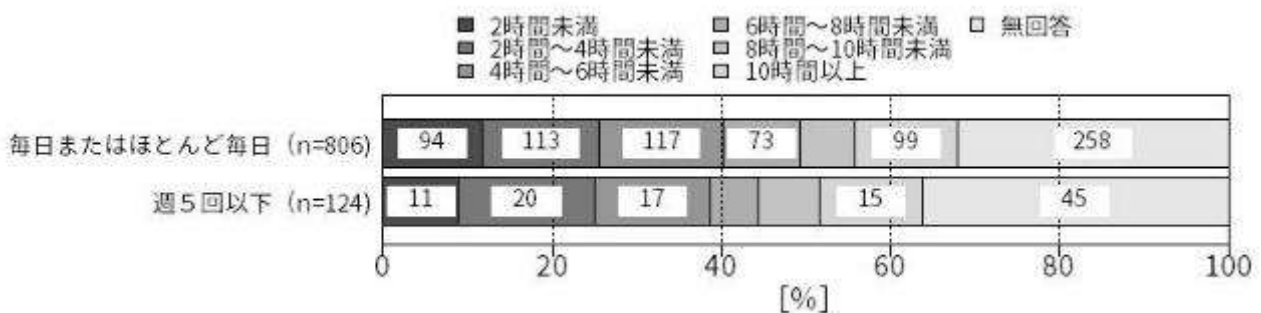
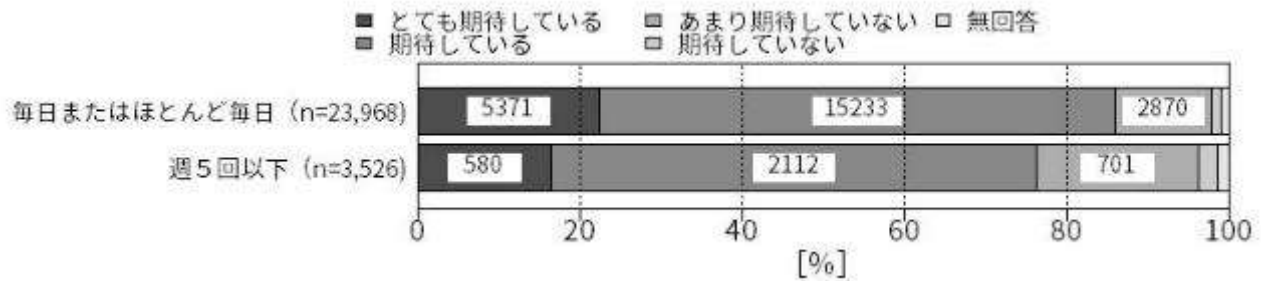


図 185. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり
（子どもと一緒にいる時間（休日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では「4 時間～6 時間未満」と回答した割合が高く 14.5%であった。「週 5 回以下」の人では「2 時間～4 時間未満」と回答した割合が高く 16.1%であった。いずれも無回答が 3 割強を占めている。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）
（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(4)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

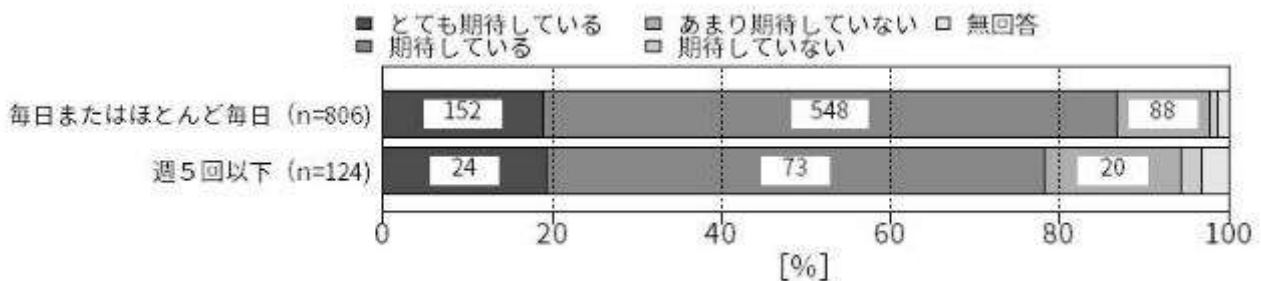


図 186. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

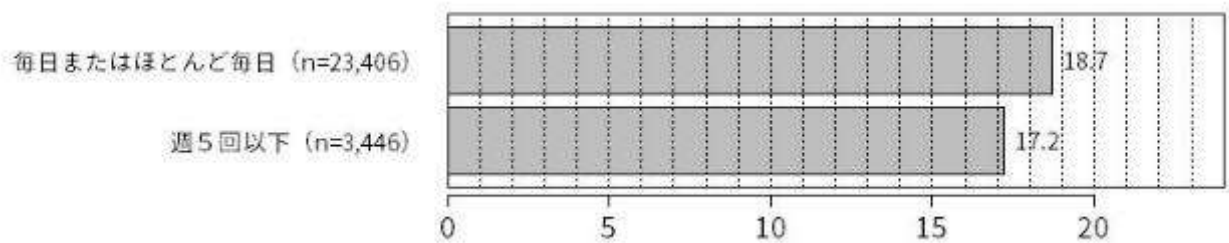
朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では、「とても期待している」「期待している」をあわせて、86.9%であったのに対して、「週5回以下」の人では、「とても期待している」「期待している」と回答した人をあわせて78.3%であった。

朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問 5(1) × 子ども票 問 26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

＜大阪市 24 区＞



＜大阪市港区＞

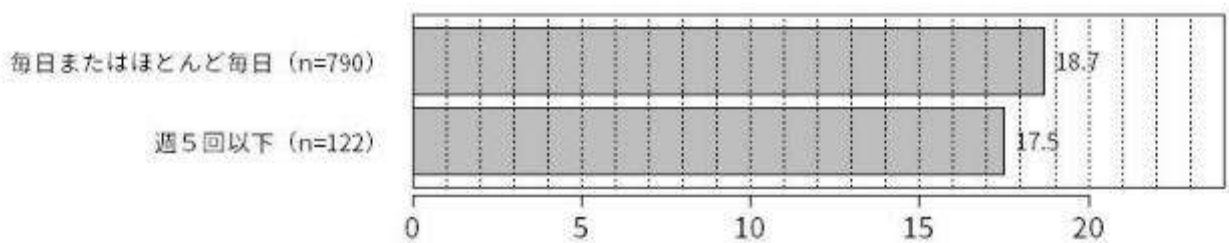
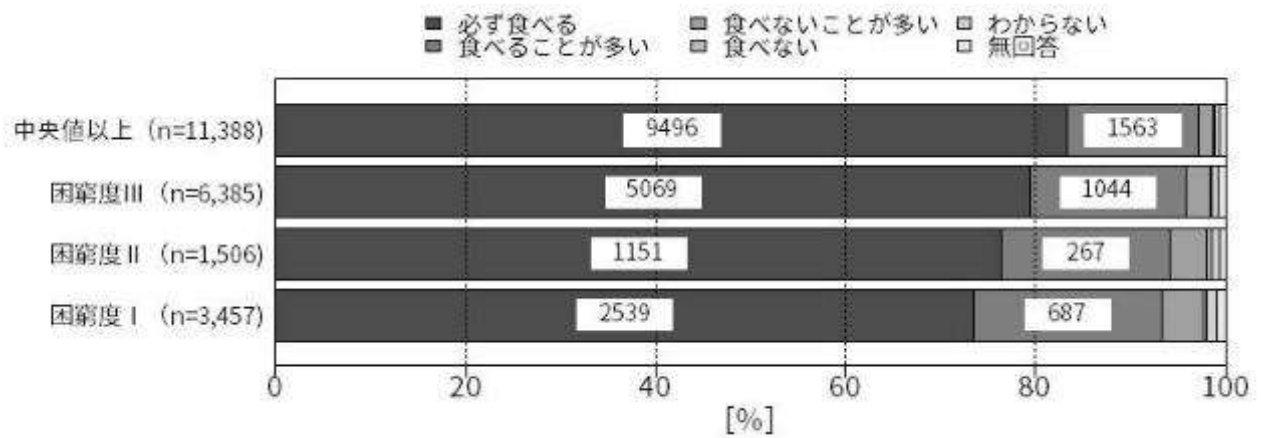


図 187. 朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、18.7 点であったのに対して、「週 5 回以下」では、17.5 点であった。

困窮度別に見た、昼食の頻度（子ども票 問 7）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

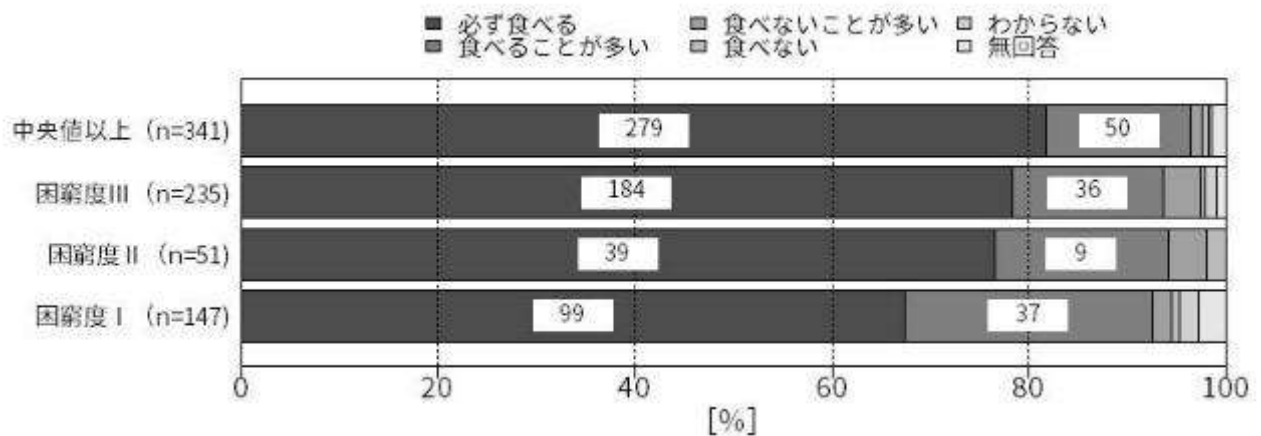
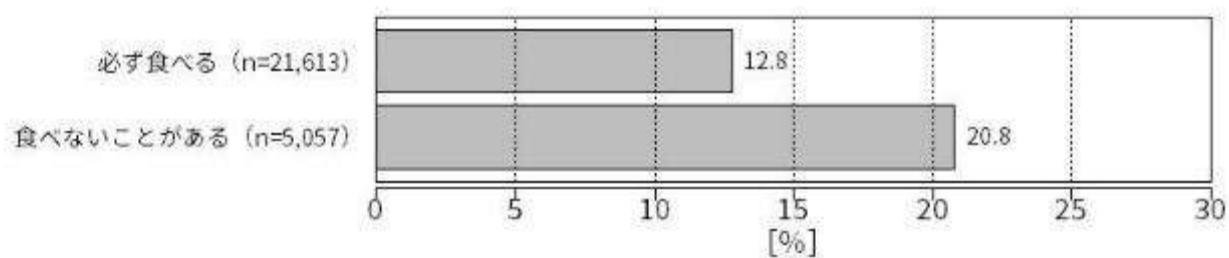


図 188. 困窮度別に見た、昼食の頻度

中央値以上群では、昼食を「必ず食べる」が 81.8%であったのに対し、困窮度Ⅱ群では 76.5%、困窮度Ⅰ群では 67.3%であった。

昼食の頻度別に見た、相談相手のいない割合（子ども票 問7 × 子ども票 問22）

<大阪市24区>



<大阪市港区>

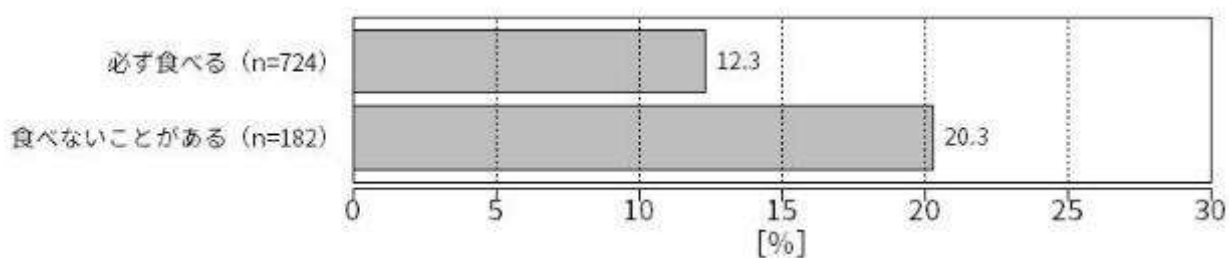


図 189. 昼食の頻度別に見た、相談相手のいない割合

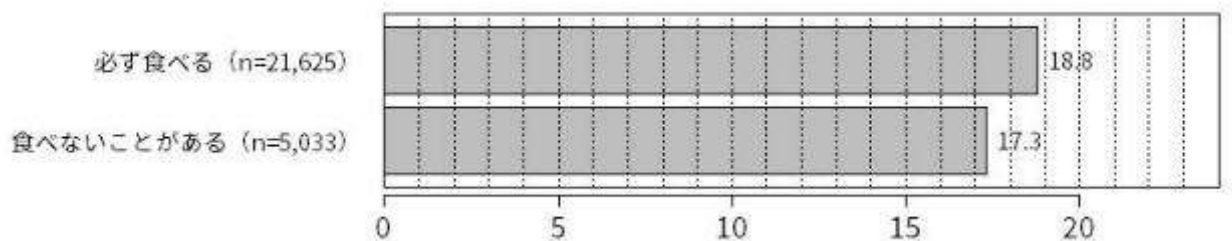
昼食の頻度別に、相談相手のいない割合を見ると、昼食を食べないことがある群が、「相談しない」と答えた割合が 20.3%であった。

昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問 7 × 子ども票 問 26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

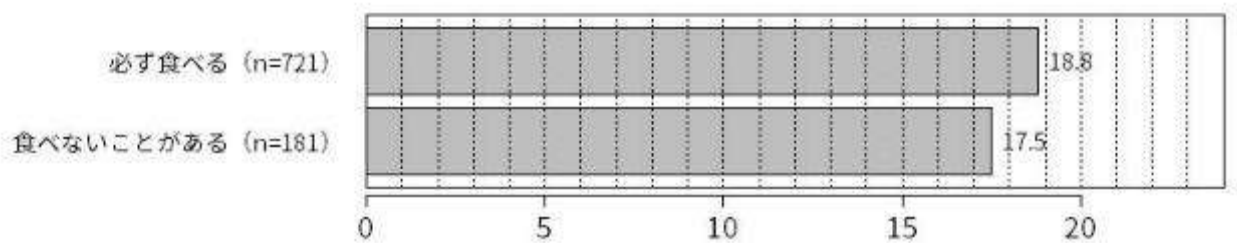
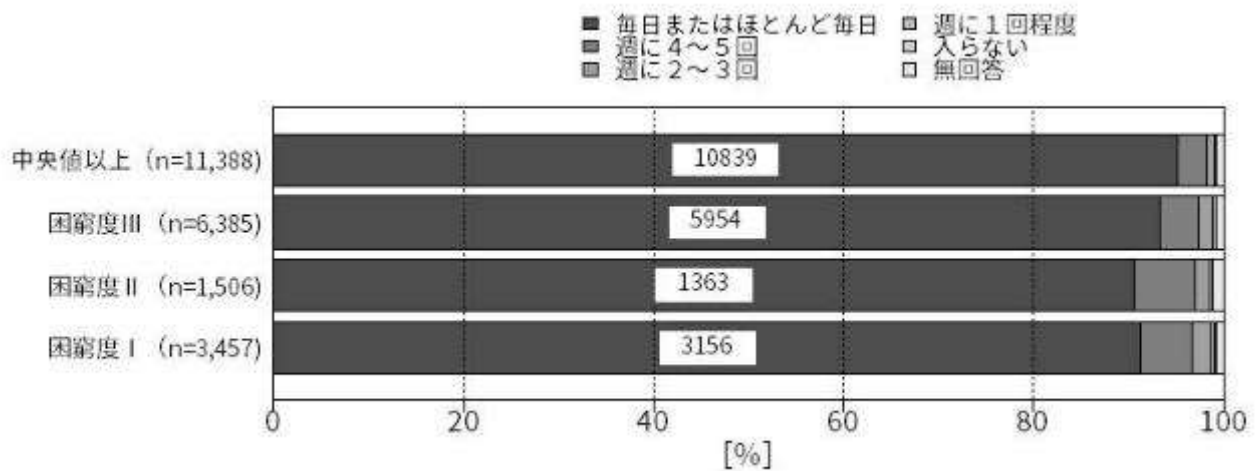


図 190. 昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が 18.8 点であったのに対して、「食べないことがある」と回答した人は 17.5 点であった。

困窮度別に見た、入浴頻度（子ども票 問 8）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

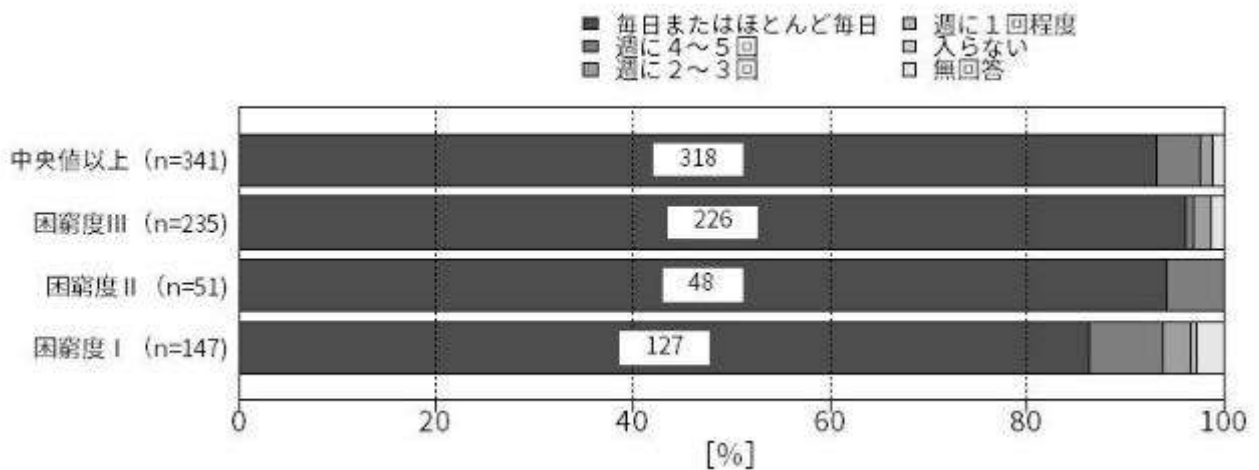
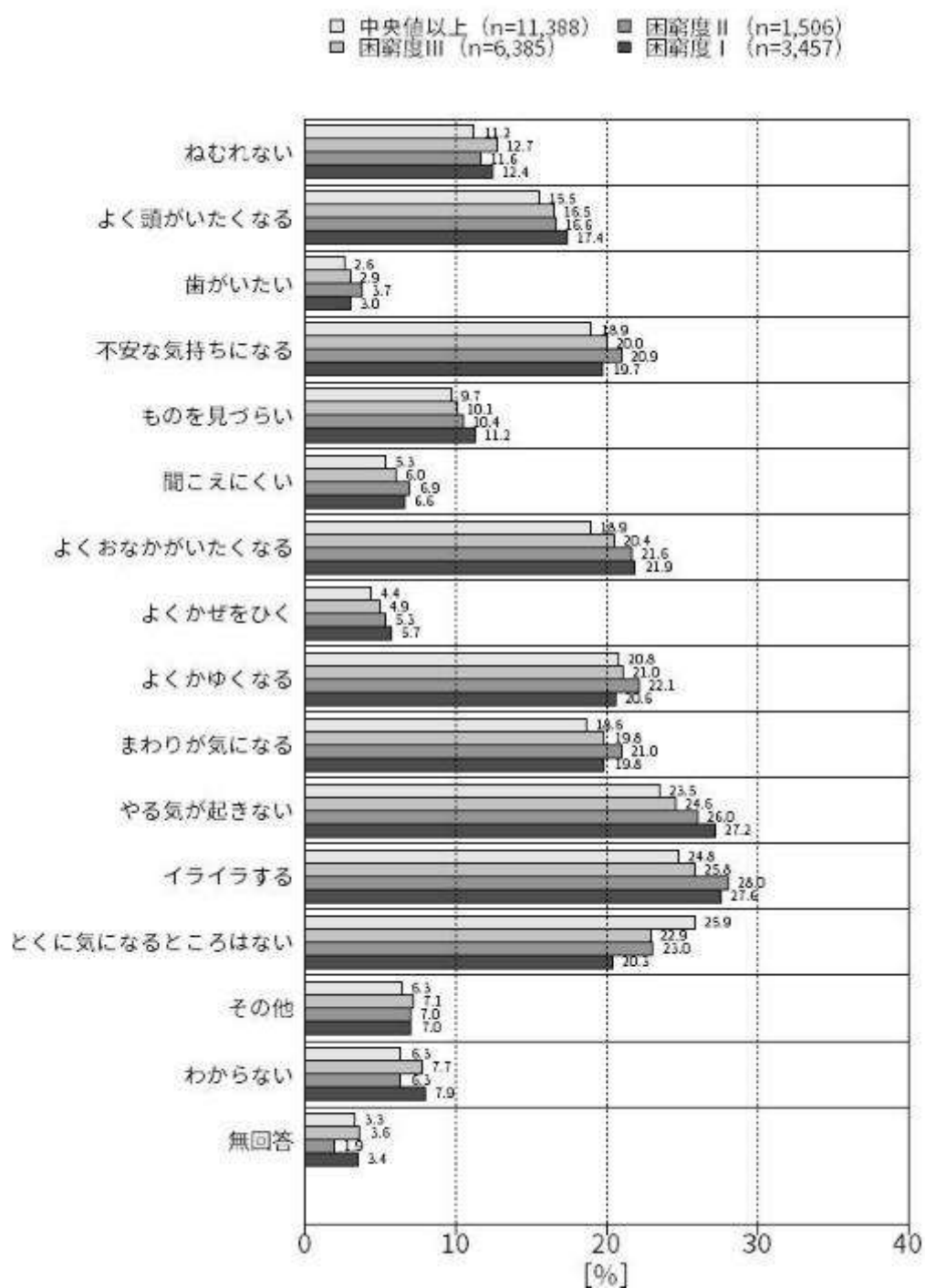


図 191. 困窮度別に見た、入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合は中央値以上群では93.3%、困窮度Ⅰ群では86.4%であった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども票 問24）

<大阪市 24 区>



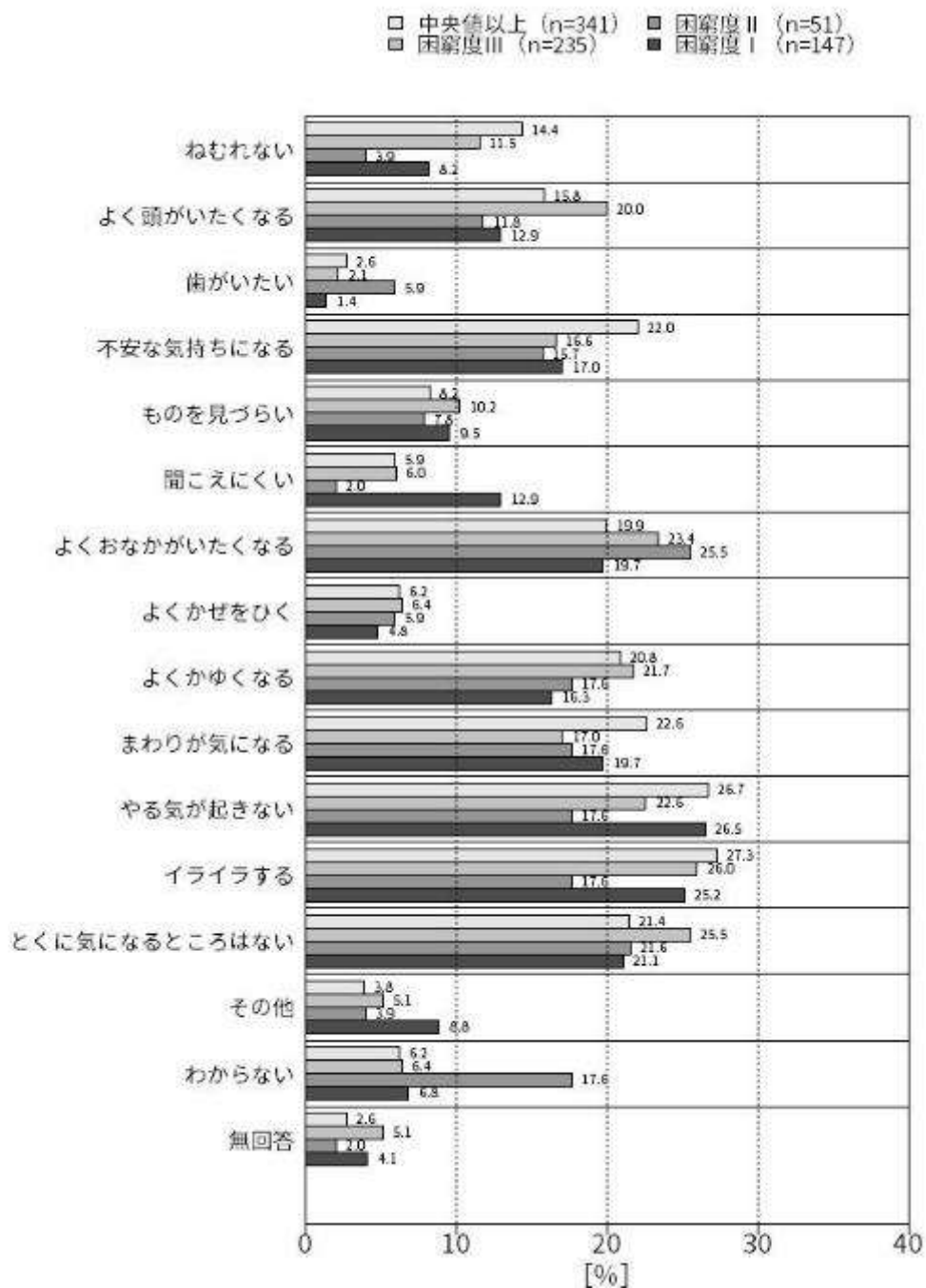


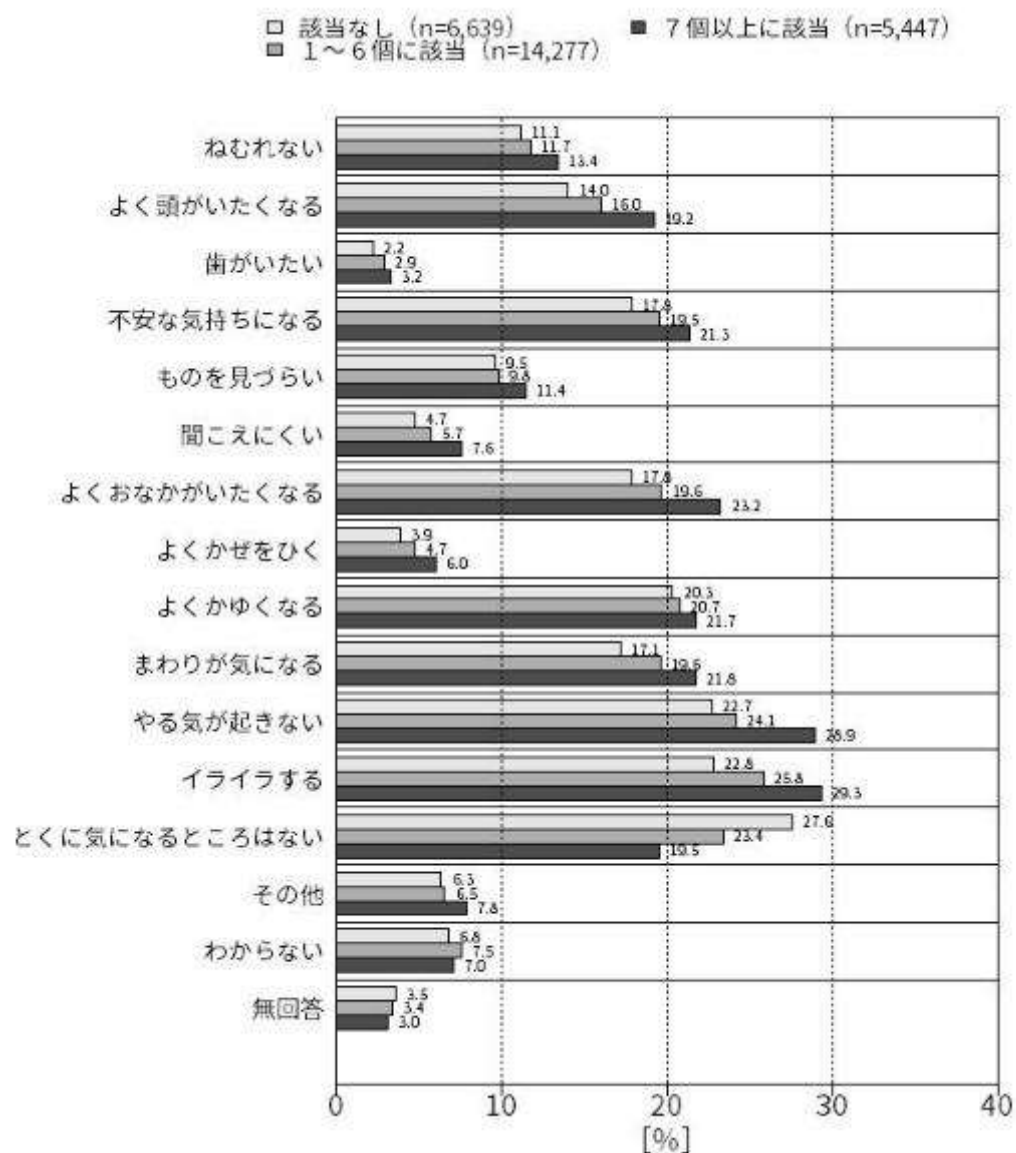
図 192. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「その他」8.8%（中央値以上群に対して、2.3 倍、「聞こえにくい」12.9%（2.2 倍）、「ものを見づらい」8.8%（2.3 倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。また、中央値以上群において、「不安な気持ちになる」、「ねむれない」が高くなっている。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

(保護者票 問7 × 子ども票 問24)

<大阪市24区>



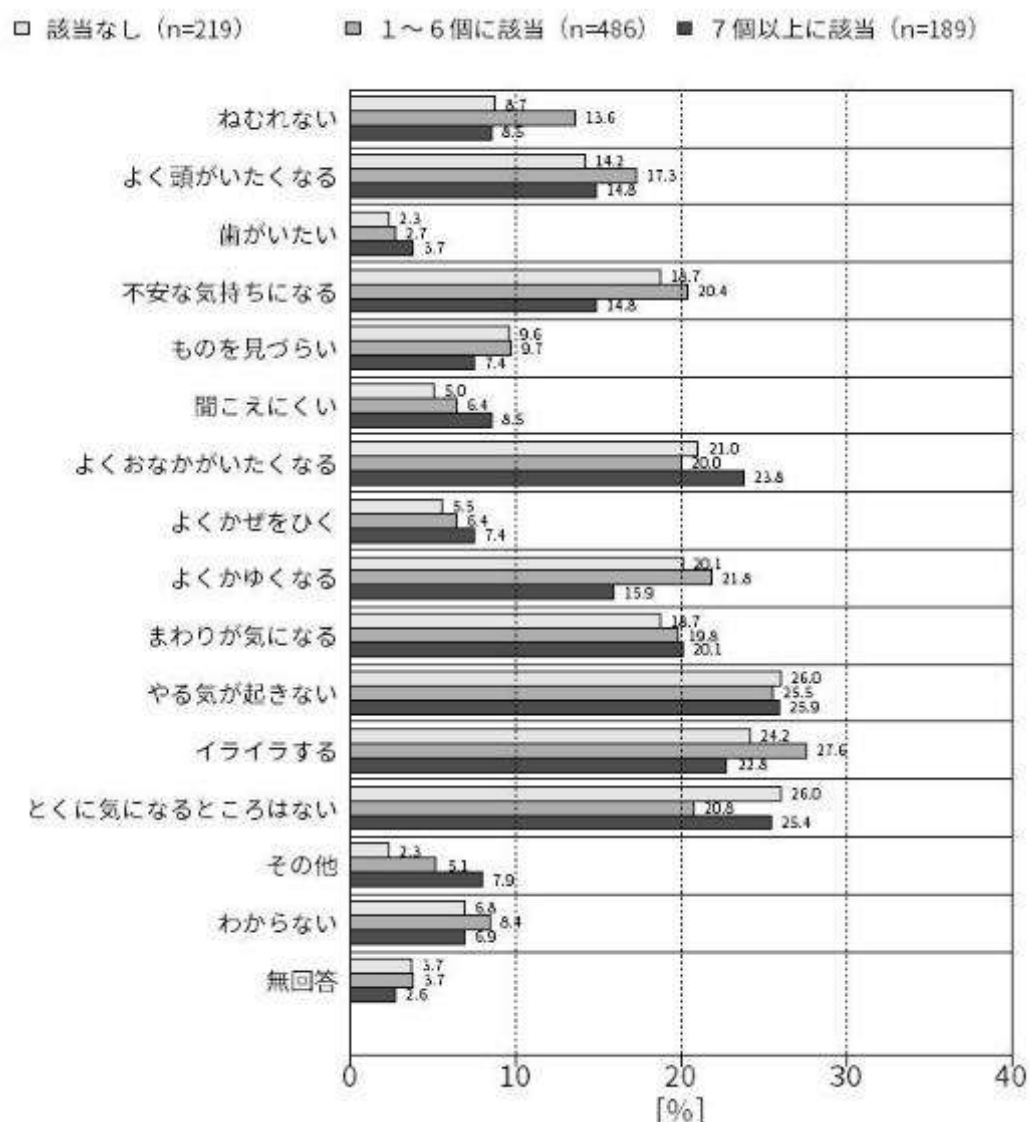
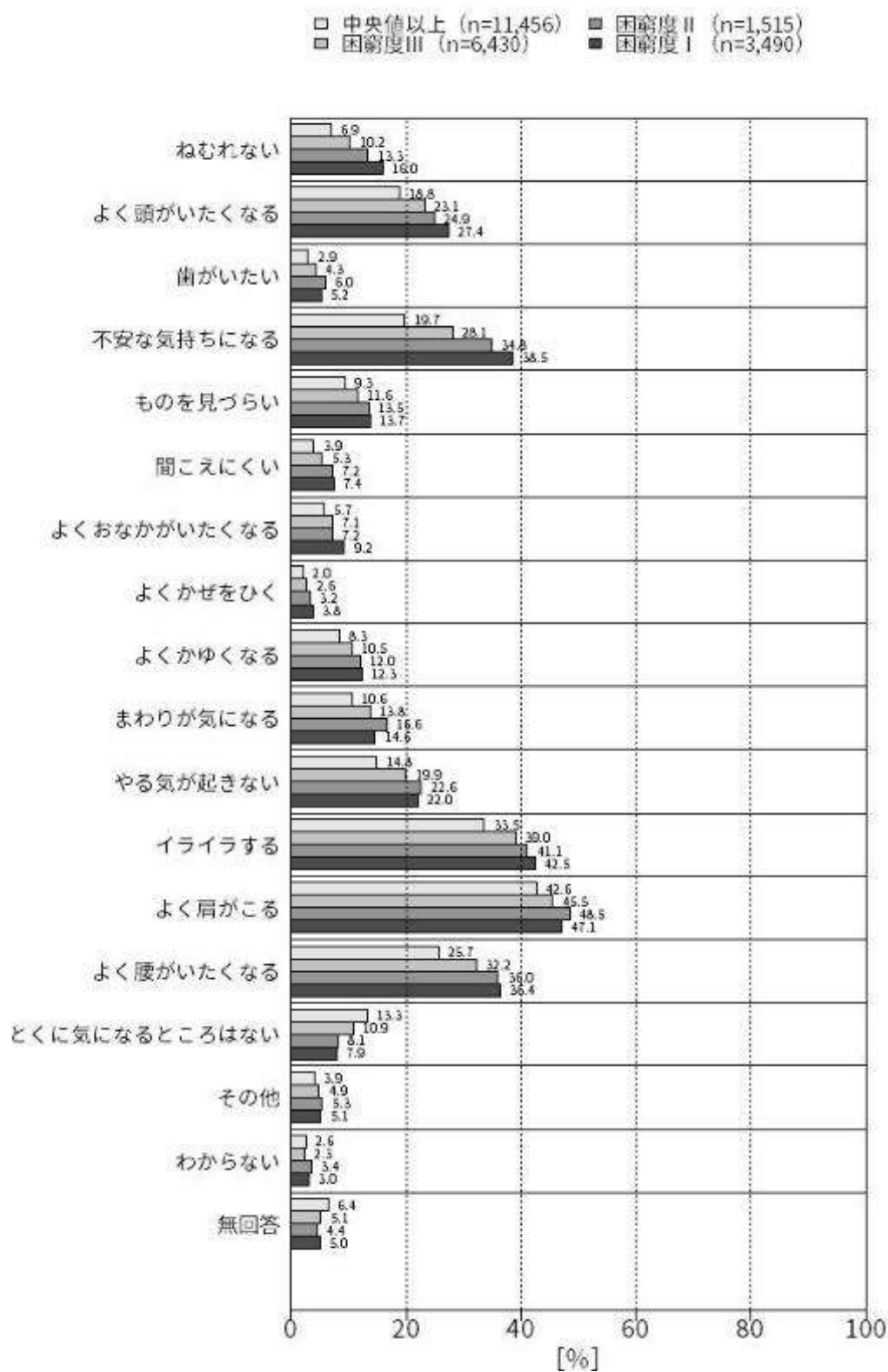


図 193. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「聞こえにくい」8.5%（「該当なし」に対し1.7倍）、「歯がいたい」3.7%（1.6倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「よくおなかがいたくなる」23.8%（1.1倍）、「まわりが気になる」20.1%（1.1倍）、など、心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票 問26）

<大阪市 24 区>



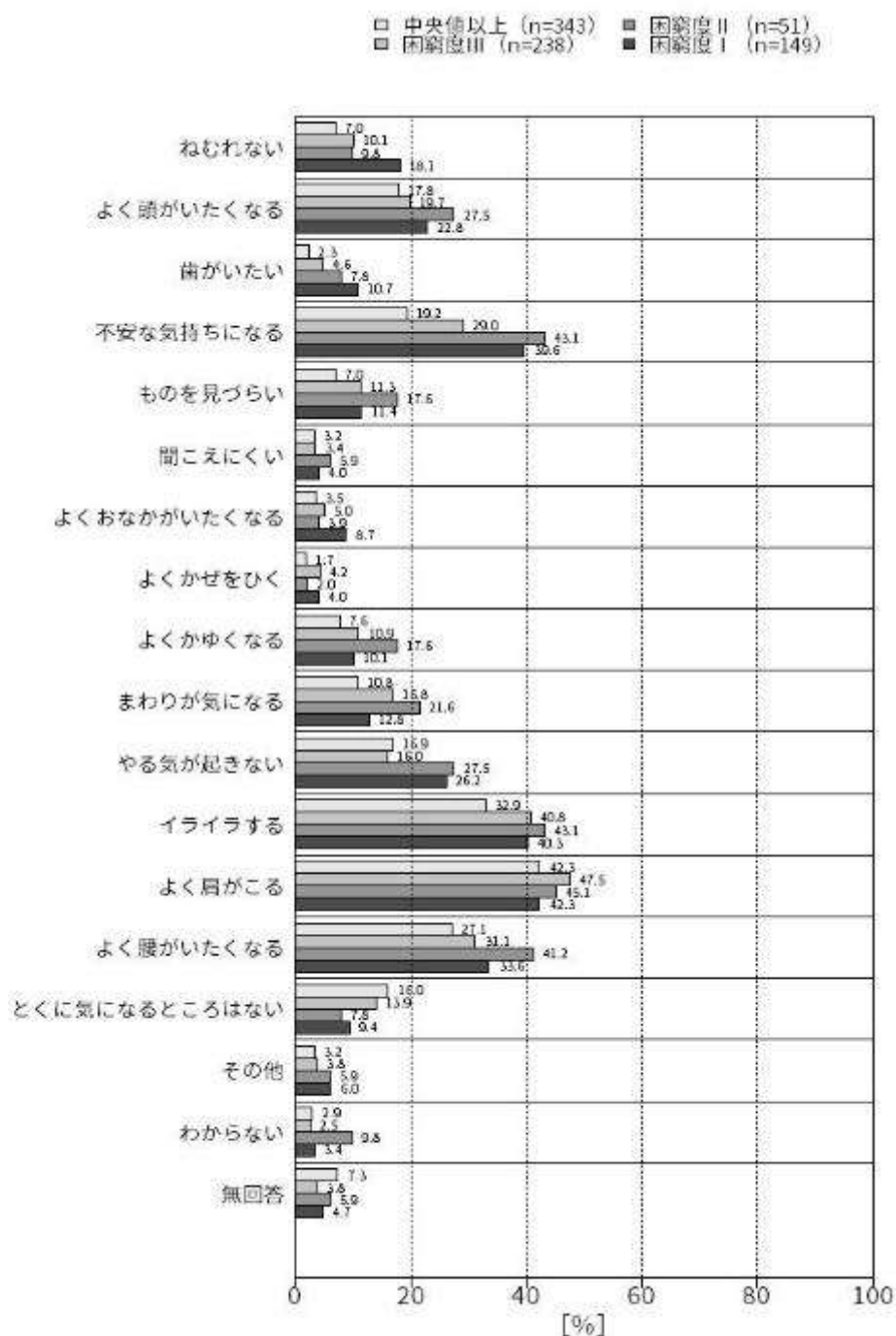
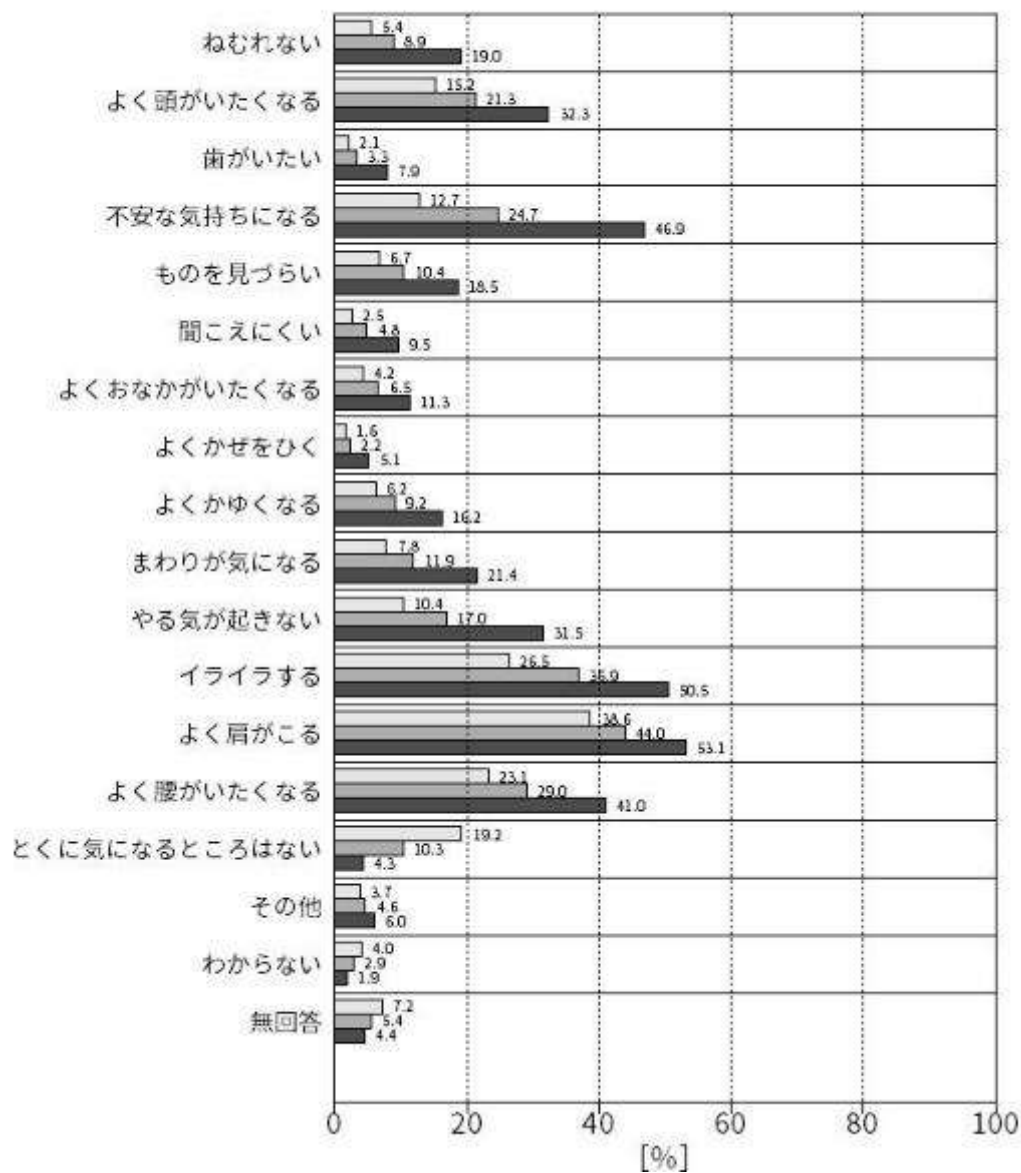


図 194. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になること（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっている。特に困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「歯がいたい」10.7%（中央値以上群に対して、4.7倍）、「ねむれない」18.1%（2.6倍）、「よくおなかがいたくなる」8.7%（2.5倍）となっている。つづいて、「よくかぜをひく」4%（2.4倍）、「不安な気持ちになる」39.6%（2.1倍）という影響もみられた。

(保護者票 問 7 × 保護者票 問 26)

☐ 該当なし (n=6,691) ■ 7個以上に該当 (n=5,497)
☒ 1～6個に該当 (n=14,370)



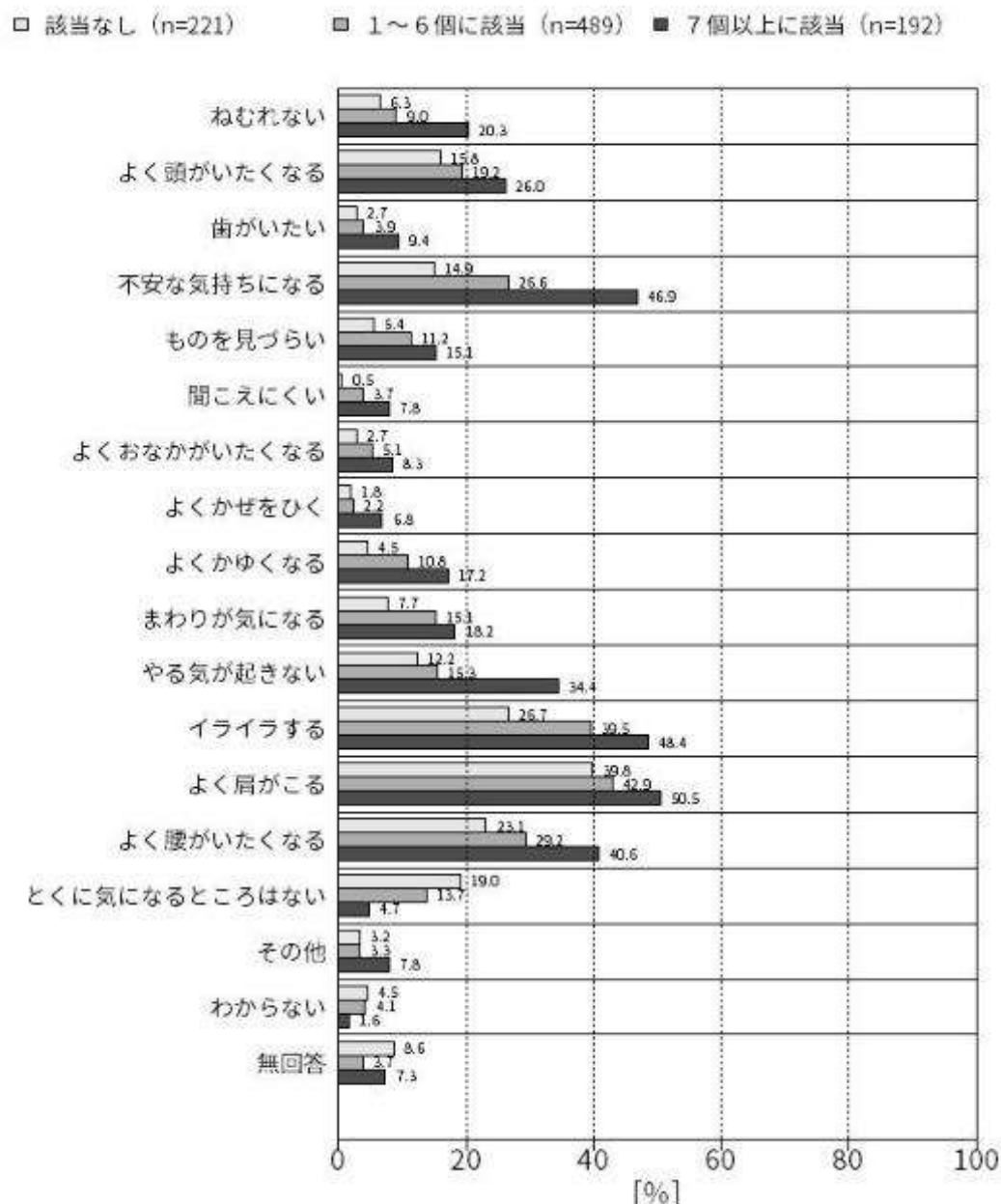
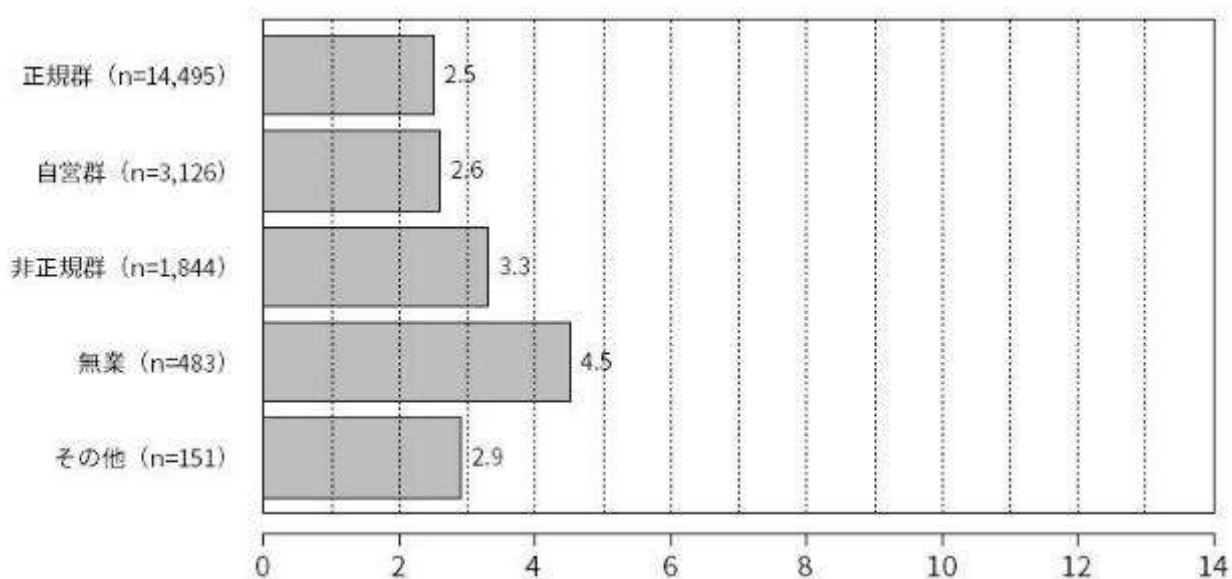


図 195. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「聞こえにくい」7.8%（「該当なし」に対し15.6倍）、「よくかゆくなる」17.2%（3.8倍）、「よくかぜをひく」6.8%（3.8倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「やる気が起きない」34.4%（2.8倍）、「イライラする」48.4%（1.8倍）など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

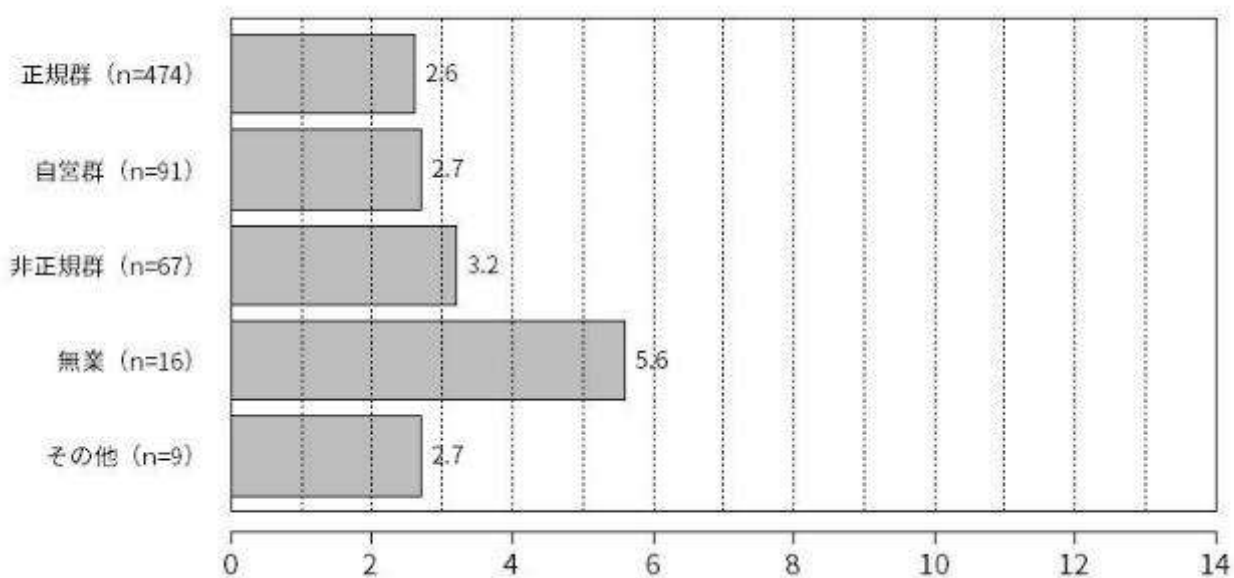


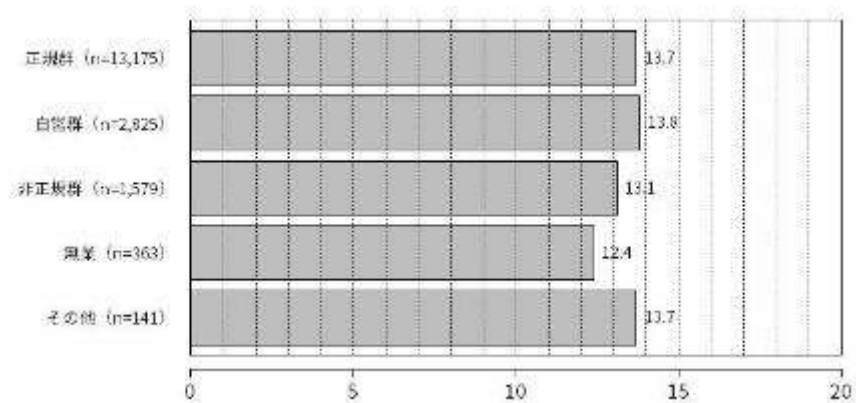
図 196. 就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数

就労状況別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「正規群」では 2.6 個、「自営業」では 2.7 個、「非正規群」では 3.2 個、「無業群」では 5.6 個であった。

就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票 問 29①～⑤）

※成田・下仲・中里他（1995）の特性的自己効力感尺度より「自分が立てた目標や計画はうまくできる自信がある」、「はじめはうまくいかない事でも、できるまでやり続ける」、「人の集まりの中では、うまくふるまえない」、「私は自分から友達を作るのがうまい」、「人生で起きる問題の多くは自分では解決できない」の5項目を抽出して使用した。それぞれの項目について、「そう思う」～「思わない」までの4段階で評価させ、5項目の合計得点を大人のセルフ・エフィカシー得点とした。得点が高いほど、自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高いことを表す。

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

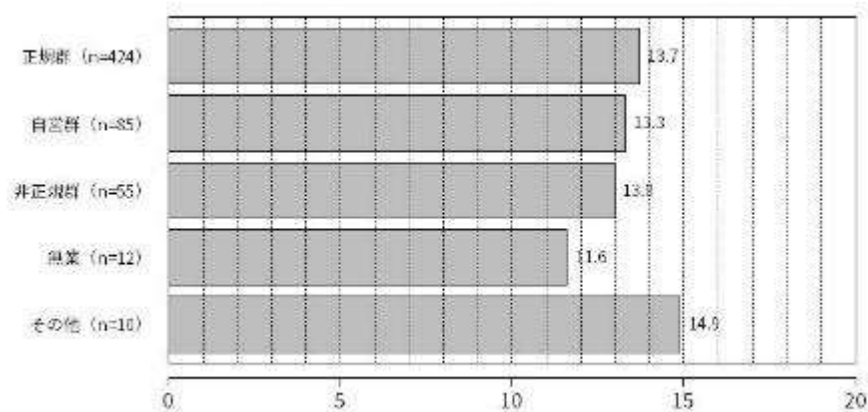


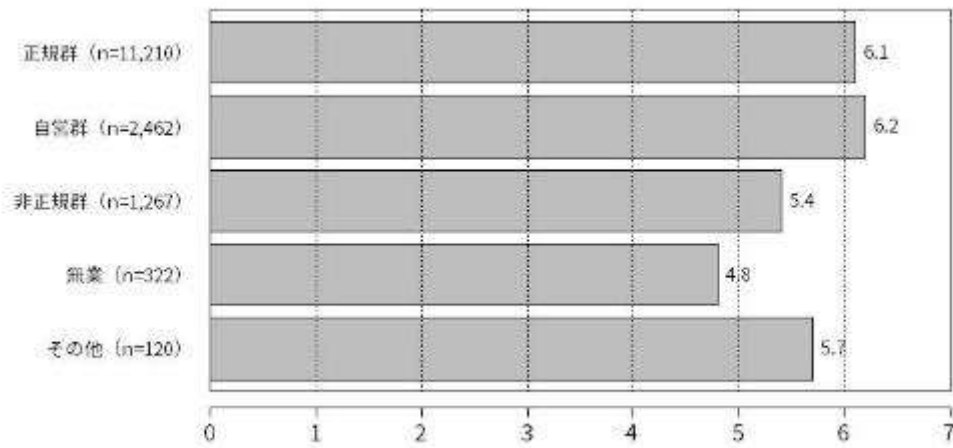
図 197. 就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

就労状況別に保護者の自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、「正規群」では 13.7 点、「自営群」では 13.3 点、「非正規群」では 13.0 点、「無業群」では 11.6 点であった。

就労状況別に見た、支えてくれる人得点（保護者票 問 23①～⑦）

※「あなたを支え、手伝ってくれる人はいますか」という質問について、「心配ごとや悩みごとを親身になって聞いてくれる人」「あなたの気持ちを察して思いやってくれる人」「趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる人」「子どもとの関わりについて、適切な助言をしてくれる人」「子どもの学びや遊びを豊かにする情報を教えてくれる人（運動や文化活動）」「子どもの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる人」「留守を頼める人」の7項目を提示した。それぞれの人物が「いる」か「いない」かで評定させたうえで、「いない」を0点、「いる」を1点とし、7項目の合計得点を「支えてくれる人得点」とした。得点が高いほど、身近に支えてくれる人が多く存在することを表す。

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

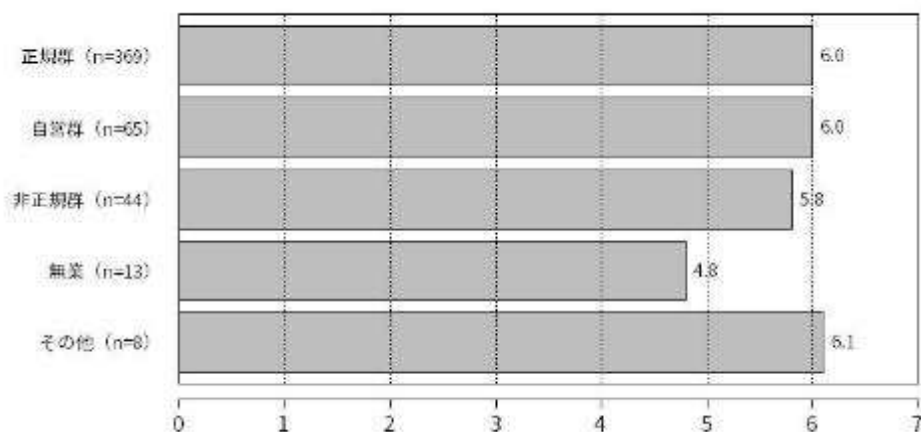
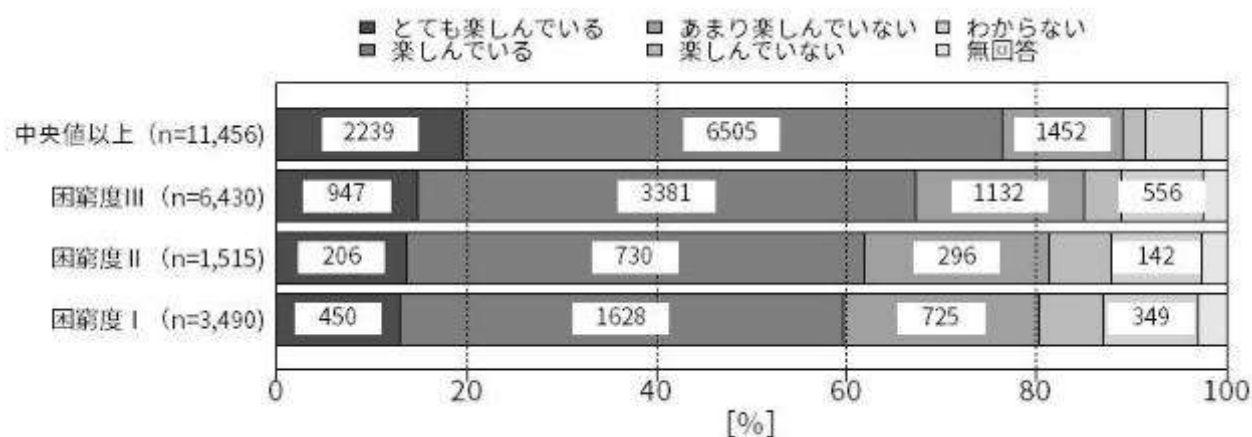


図 198. 就労状況別に見た、支えてくれる人得点

就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見ると、「正規群」では6.0点、「自営群」では6.0点、「非正規群」で5.8点、「無職」で4.8点であった。

困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）（保護者票 問 25(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

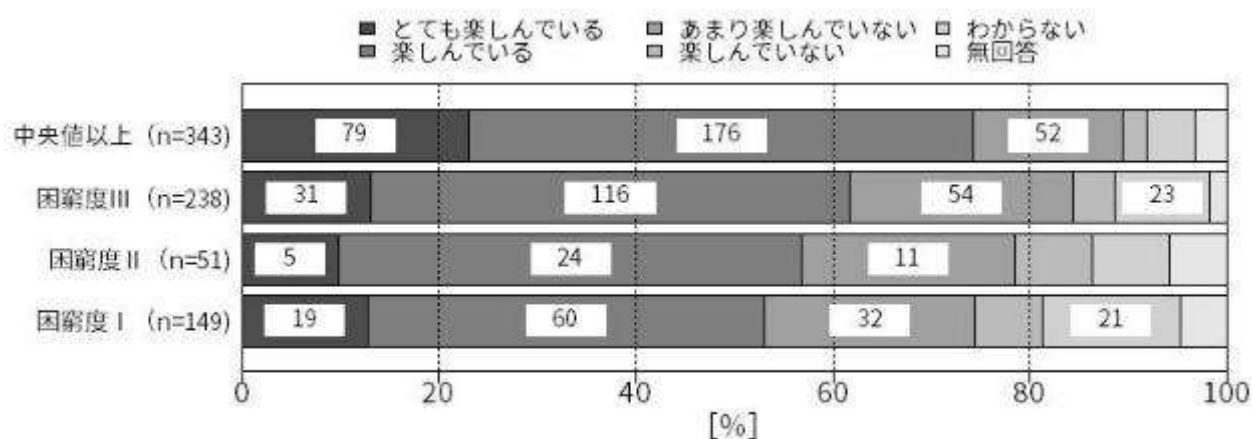
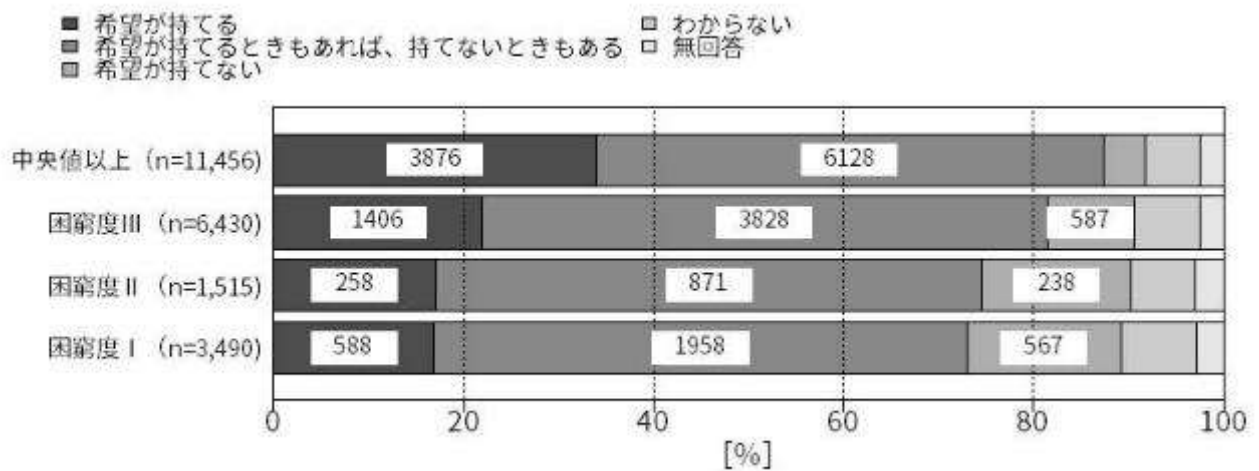


図 199. 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群が 74.3% であり、困窮度が高まるにつれて、「とても楽しんでいる」と「楽しんでいる」の割合が低くなる傾向にあった。逆に、「楽しんでいる」と回答した割合は、中央値以上群が 2.3%、困窮度Ⅲ群で 4.2%、困窮度Ⅱ群で 7.8%、困窮度Ⅰ群で 6.7%となった。

困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）（保護者票 問 25 (2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

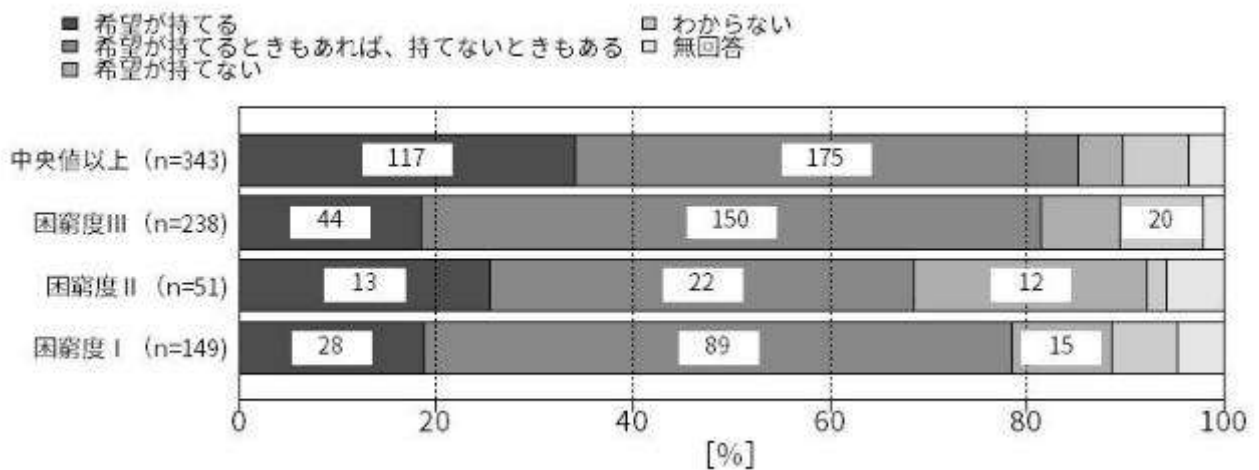
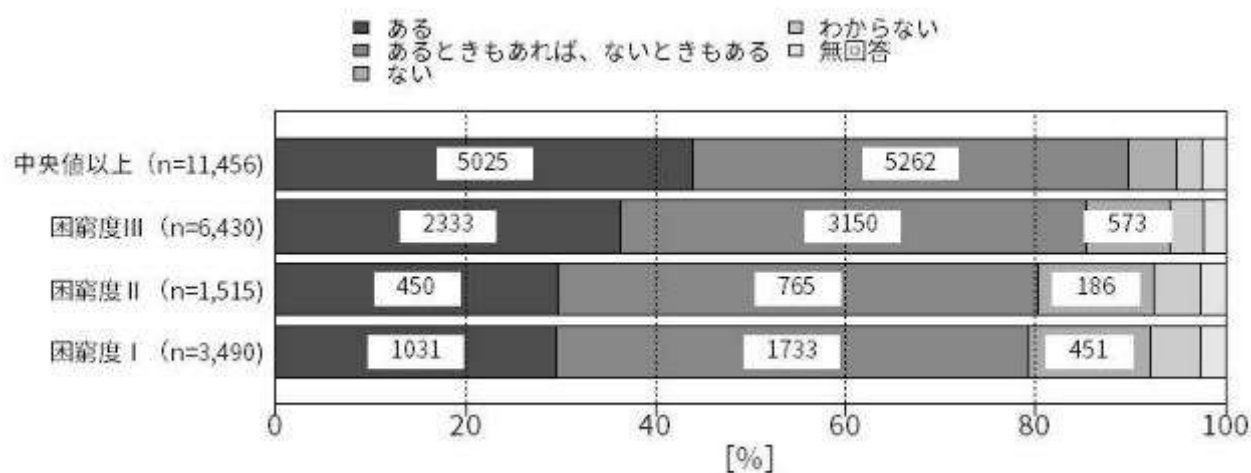


図 200. 困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）

困窮度別に将来への希望を見ると、「希望が持てる」と回答する割合は、中央値以上群では、34.1%であったのに対し、困窮度Ⅲ群では 18.5%、困窮度Ⅱ群では 25.5%、困窮度Ⅰ群では、18.8%という結果となった。

困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）（保護者票 問 25(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

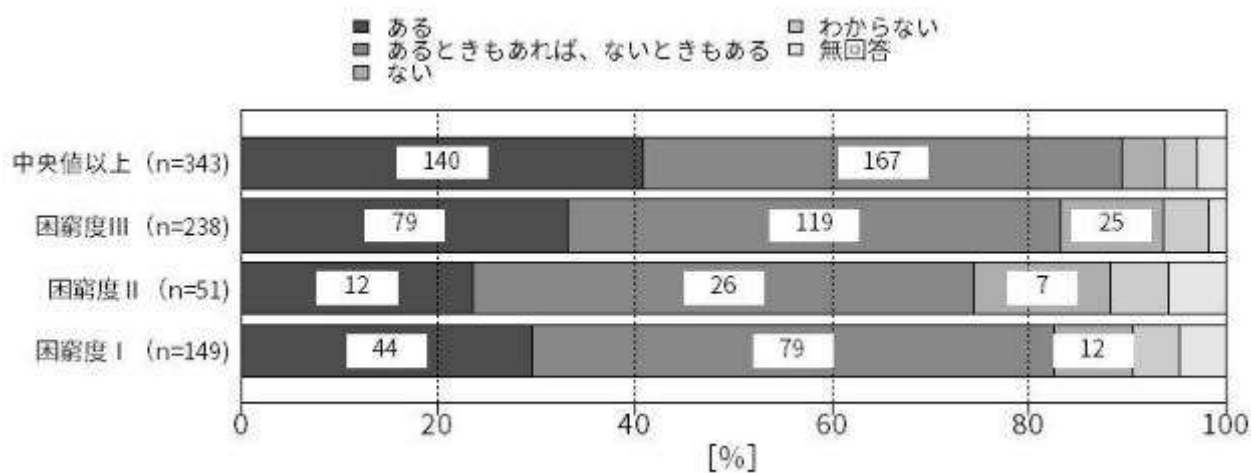
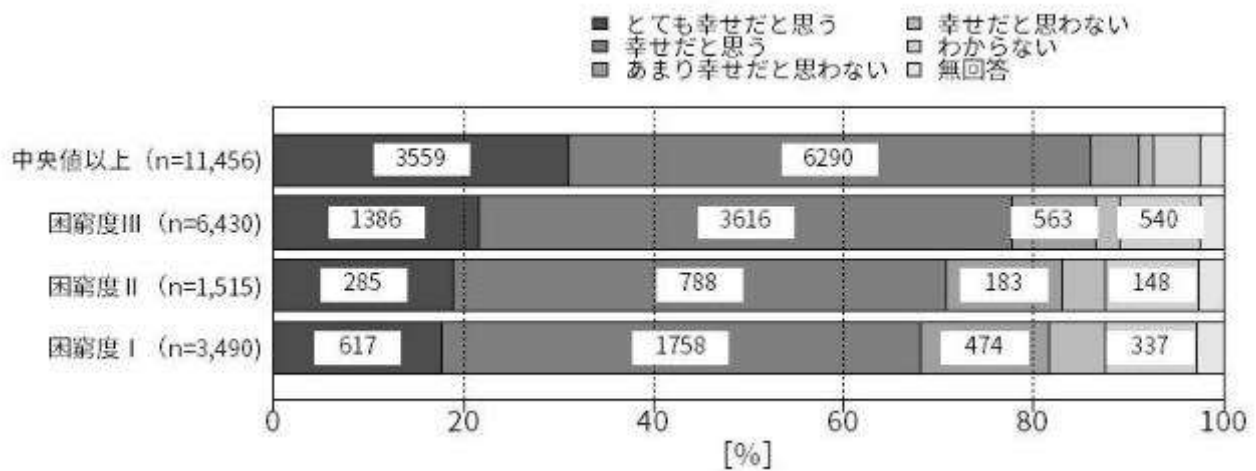


図 201. 困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）

困窮度別にストレスを発散できるものについて、ストレスが発散できるものが「ある」という回答に着目すると、中央値以上群では 40.8%で、困窮度Ⅲ群 33.2%、困窮度Ⅱ群 23.5%、困窮度Ⅰ群 29.5%となっている。

困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）（保護者票 問 25(4)）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

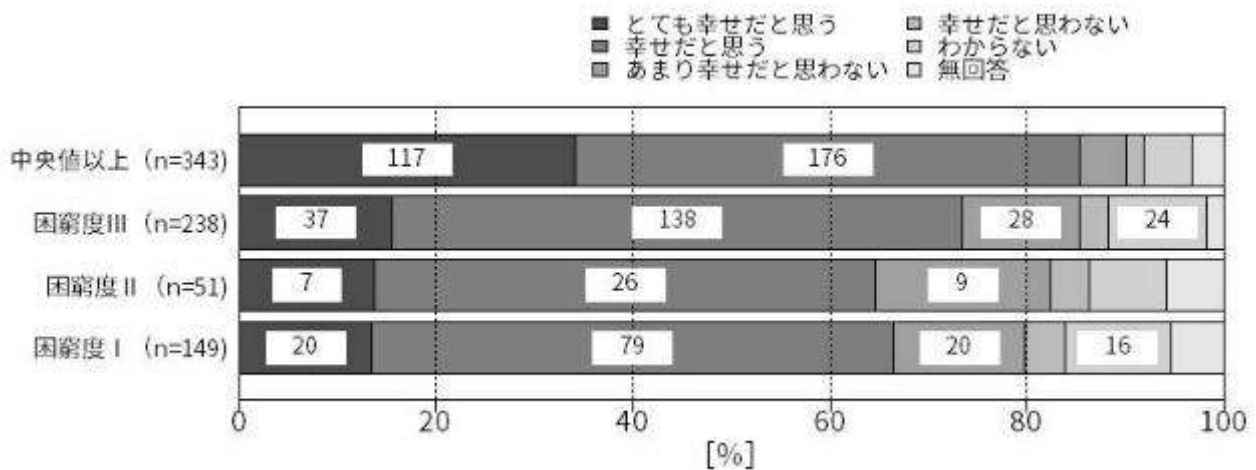
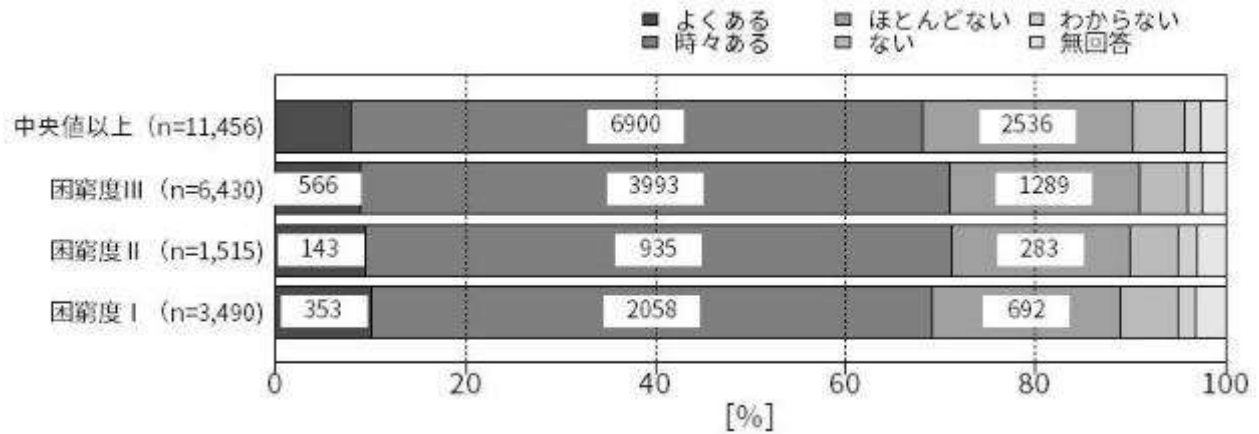


図 202. 困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）

困窮度別に幸せだと思うかを見ると、「とても幸せと思う」「幸せだと思う」あわせた割合は、困窮度が高まるにつれて低くなる傾向にある。逆に、「あまり幸せだと思わない」「幸せだと思わない」をあわせた割合が高くなり、中央値以上群では 6.4 %で、困窮度Ⅲ群 14.7 %、困窮度Ⅱ群 21.5 %、困窮度Ⅰ群 17.4 %となっている。

困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと
(保護者票 問 27)

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

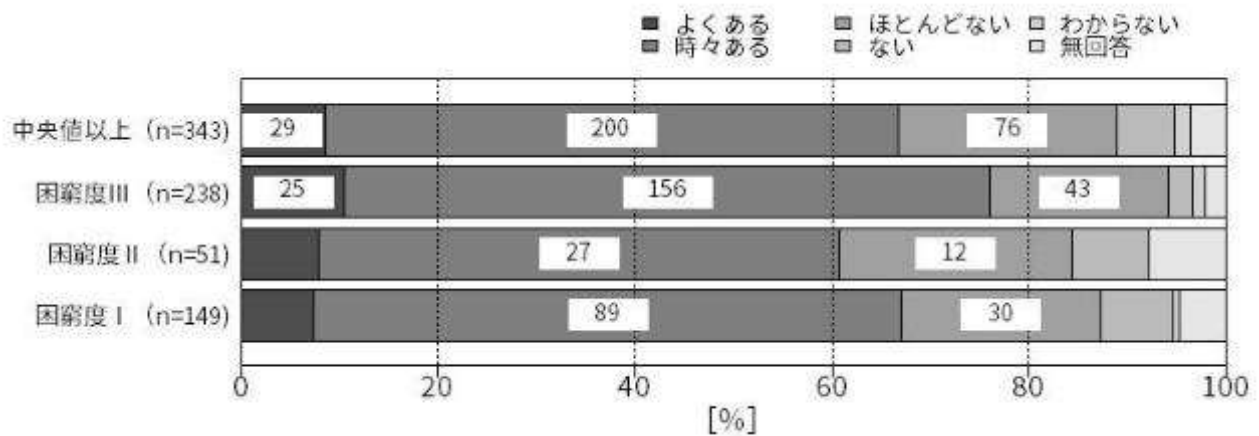
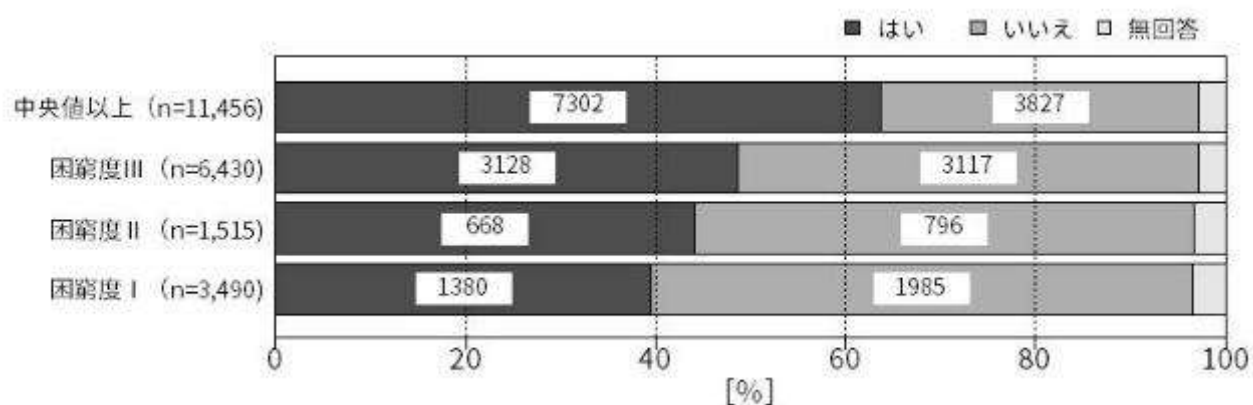


図 203. 困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

困窮度別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、困窮度による大きな差は見られない。

困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診（保護者票 問 28）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

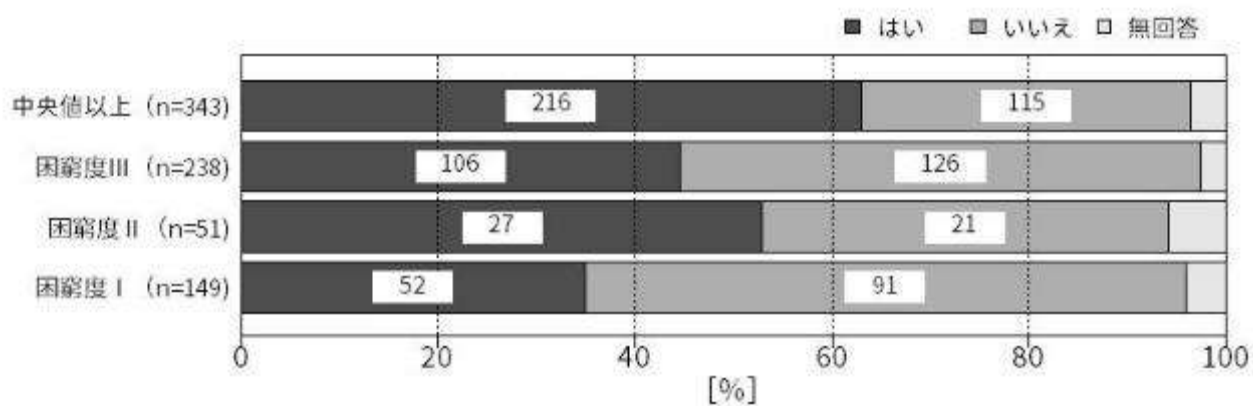


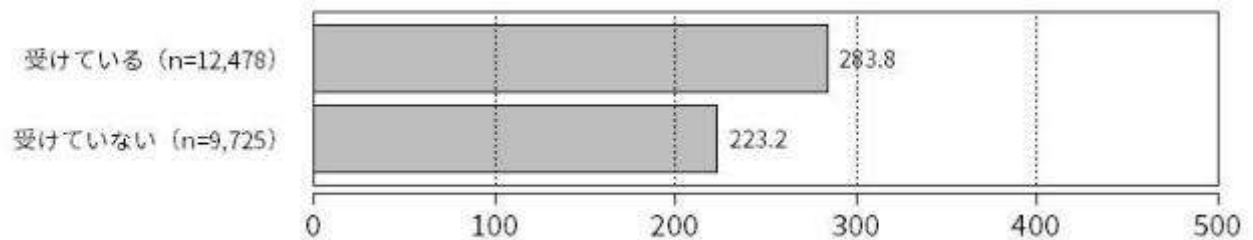
図 204. 困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診

困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、「受診あり」の回答の割合は中央値以上群が 63.0%であり、困窮度Ⅰ群では 34.9%であった。

定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）

（保護者票 問 28 × 保護者票 問 7）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

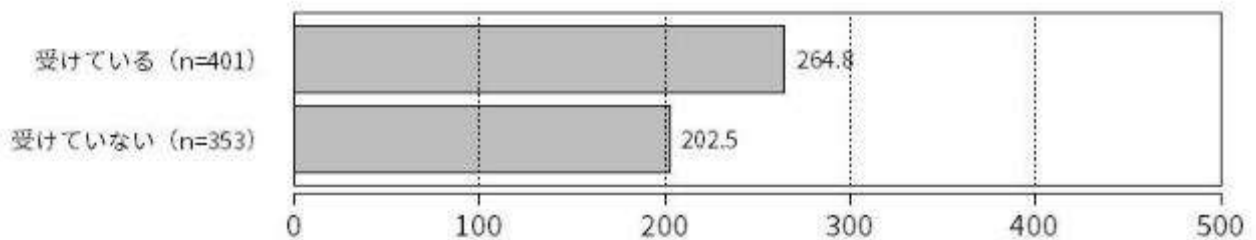


図 205. 定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）

定期的な健康診断の受診別に等価の可処分所得額を算出すると、「受診あり」では 264.8 万円、「受診なし」では 202.5 万円と等価可処分所得について差が見られた。

<健康に関する考察>

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにしたがって、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる頻度が減る傾向が見られた。困窮度Ⅰ群では、17.7%が「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていないと回答した。

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、18.7点であったのに対して、「週5回以下」では、17.5点と、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人のほうが「週5回以下」の人よりも子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高い結果となった。

困窮度別に入浴頻度を見ると、困窮度が高まるにつれ、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合が低くなっている。困窮度Ⅰ群において「毎日またはほとんど毎日」と回答した割合は86.4%であった。

困窮度別に心身の自覚症状（子ども）を見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「その他」8.8%（中央値以上群に対して、2.3倍、「聞こえにくい」12.9%（2.2倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。

困窮度別に心身の自覚症状（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっている。特に困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「歯がいたい」10.7%（中央値以上群に対して、4.7倍、「ねむれない」18.1%（2.6倍）、「よくおなかがいたくなる」8.7%（2.5倍）となっている。つづいて、「よくかぜをひく」4.0%（2.4倍）、「不安な気持ちになる」39.6%（2.1倍）という影響もみられた。

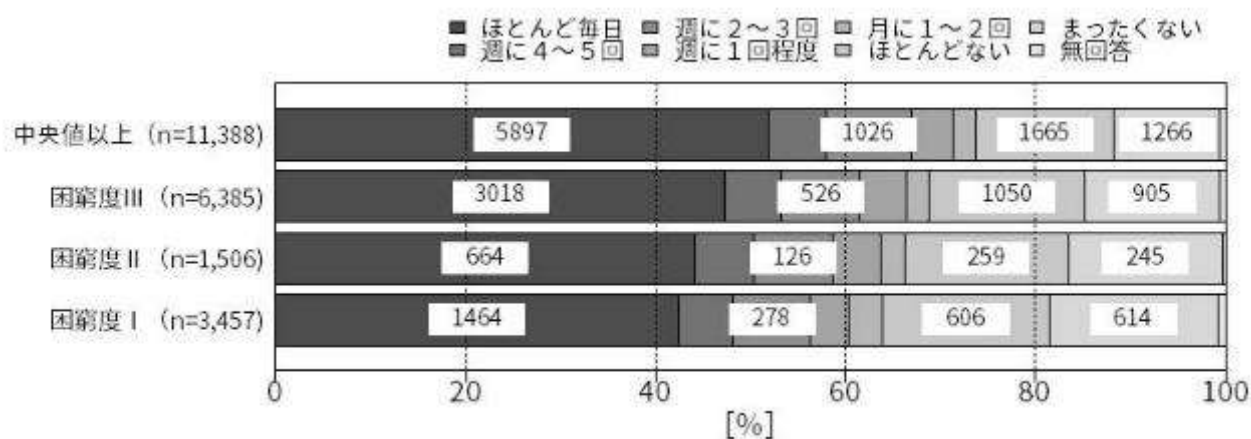
就労状況別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「正規群」、「自営業」に対して、「非正規群」において、自分の体や気持ちで気になることの該当個数がわずかに増える結果となった。

困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、「受診あり」の回答の割合は中央値以上群が高く、それ以外は低くなっている。

3-4. 家庭生活・学習

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）
（子ども票 問10①）

<大阪市24区>



<大阪市港区>

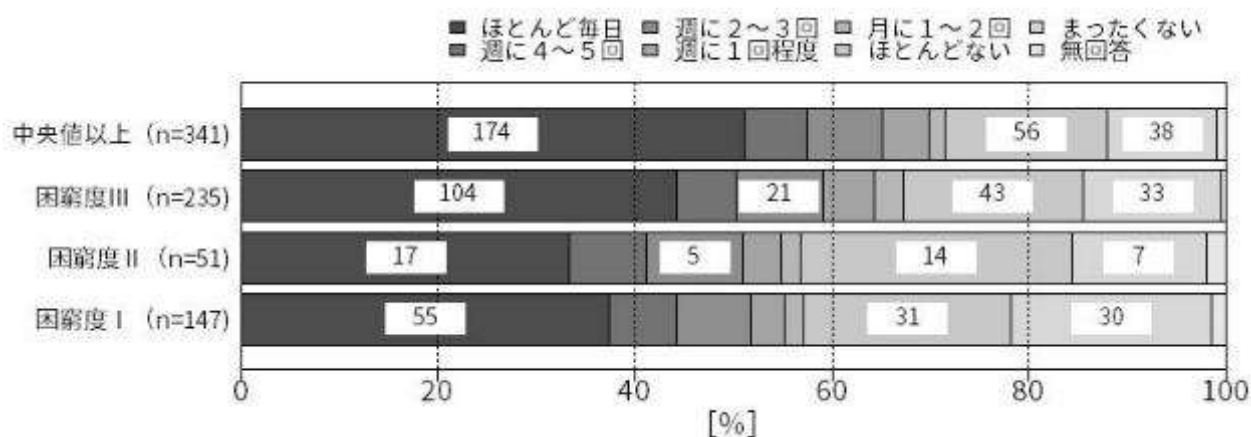
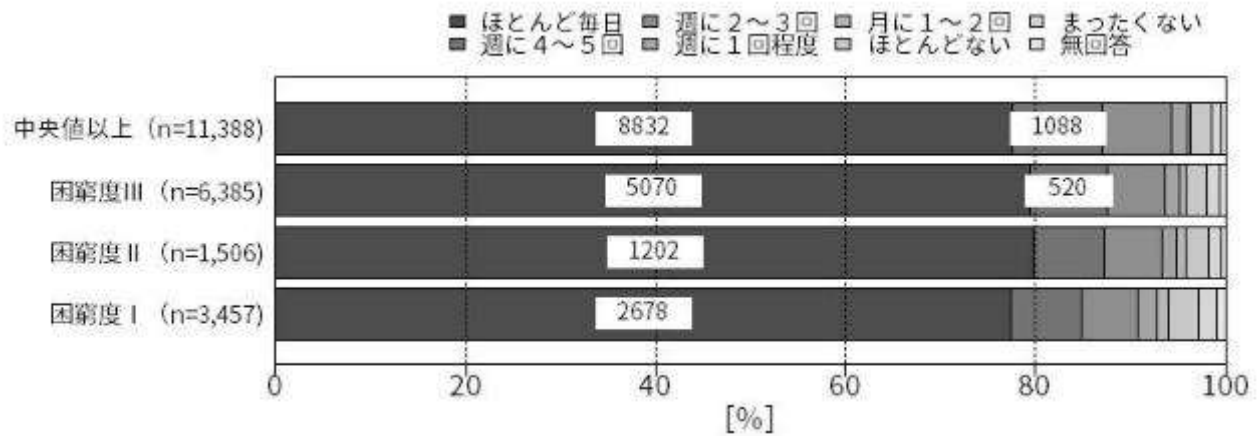


図 206. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「ほとんど毎日」と回答した割合が低くなり、「まったくない」と回答した人の割合が高くなる傾向にある。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」が20.4%、「ほとんどない」が21.1%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）
（子ども票 問 10②）

<大阪市 24 区>



<大阪市港区>

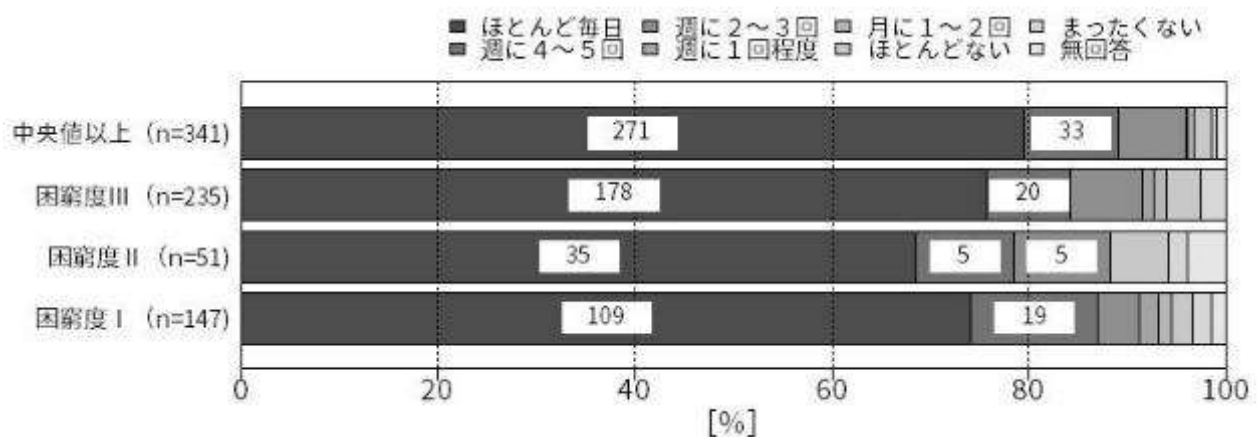


図 207. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「ほとんど毎日」と回答した人の割合が低くなる傾向にある。困窮度Ⅱ群では 68.6%、困窮度Ⅰ群では 74.1%であった。